

(3) G3区【1遺構面を検出】

[G3-1面]

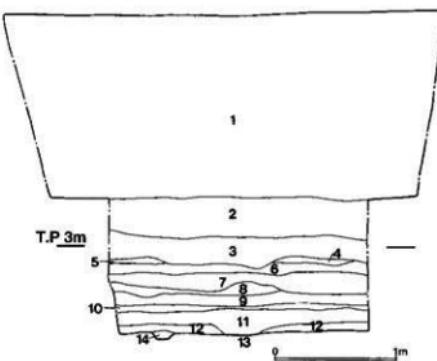
黒色粘質土層(第11層)・暗褐色砂質土層(第12層)下において第12層とはほぼ同質の第13層をベース面(標高T.P約2.3m)としてピットが6基検出された。P016～P018およびP021は深さ約8～10cmを測ったが、P019・P020は深さ2～3cmと浅かった。ここで建物跡等に復元できるピットの並びは確認できなかった。

G3-1面に関連しての遺物では、遺構に伴ってはP021で弥生土器か土師器かの破片が1点検出されたのみであるが、第11層・第12層において6世紀代の須恵器片を少量含みつつ、布留式期段階のものとみられる土師器片が多く検出された。しかし、固化できたものは199の板状に加工された木製品のみであった。

G3-1面の時期については、覆土層に須恵器を含みつつも布留式期の土師器を主体とする状況と遺構面のレベルから、TA区第Ⅸ面に相当するものとみられ、おそらく古墳時代前期後葉に属するのではないかと考えられる。

G3区において検出された遺構面はG3-1面のみであったが、遺構は検出されなかつたものの、これより上位層でも遺物を包含する土層が認められた。上位層出土遺物のうち固化できたものは第2層出土の200～203であった。

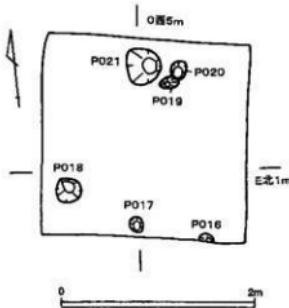
200は土師器羽釜である。幅の狭い鋸がつき、口縁部は内傾するが端部付近で屈曲して上方にのびる。外面は横ナデ、内面は板ナデ



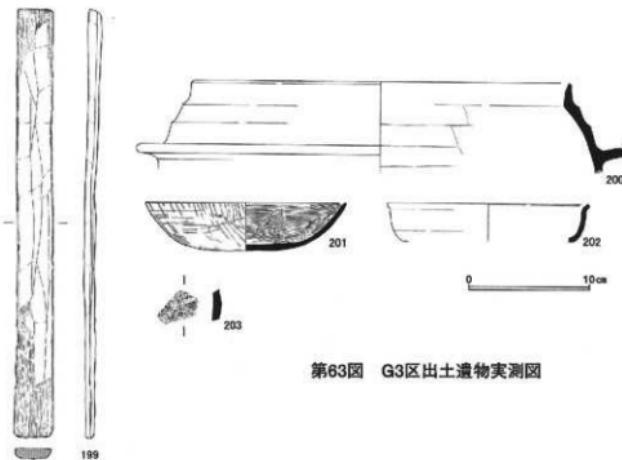
土層序

- |                 |                       |
|-----------------|-----------------------|
| 1. 現代盛土・旧表土層    | 8. 明褐色砂質土層            |
| 2. 黄灰色～灰色砂層     | 9. 暗褐色砂質土(やや粘質)層      |
| 3. 明褐色粘土(多く含む)層 | 10. 暗褐色砂質土(やや粘質)層     |
| 4. 灰褐色粗砂層       | 11. 黒色粘質土層            |
| 5. 灰色粗砂層        | 12. 暗褐色砂質土層           |
| 6. 灰色細砂層        | 13. 暗褐色砂質土層(12層とほぼ同質) |
| 7. 暗褐色粘質土層      | 14. 暗灰褐色砂質土——P016     |

第61図 G3区南壁土層断面図



第62図 G3-1面平面図



第63図 G3区出土遺物実測図

されている。

201は土師器皿である。内外面ともヘラミガキが施されているが、特に内面は密であり連続輪状のミガキが認められる。器形および調整が平安時代初頭の黒色土器皿に似る。

203は製塙土器とみられる土器片である。内面に布目痕が残り、型作りされたものである。

このように、G 3-1面より上位層においても平安時代～中世にかけての遺物が認められ、G 3-1面の上位にこの時期に相当する遺構面が存在する可能性は高いと考えられる。

#### (4) G 5 区【4 遺構面を検出】

##### 【G 5-1面】

現代盛土層直下において灰色粘質土層（第2層）をベース面（標高T. P約3.1～3.25m）として落ち込み跡1か所が検出された。落ち

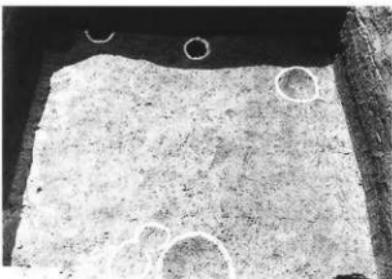
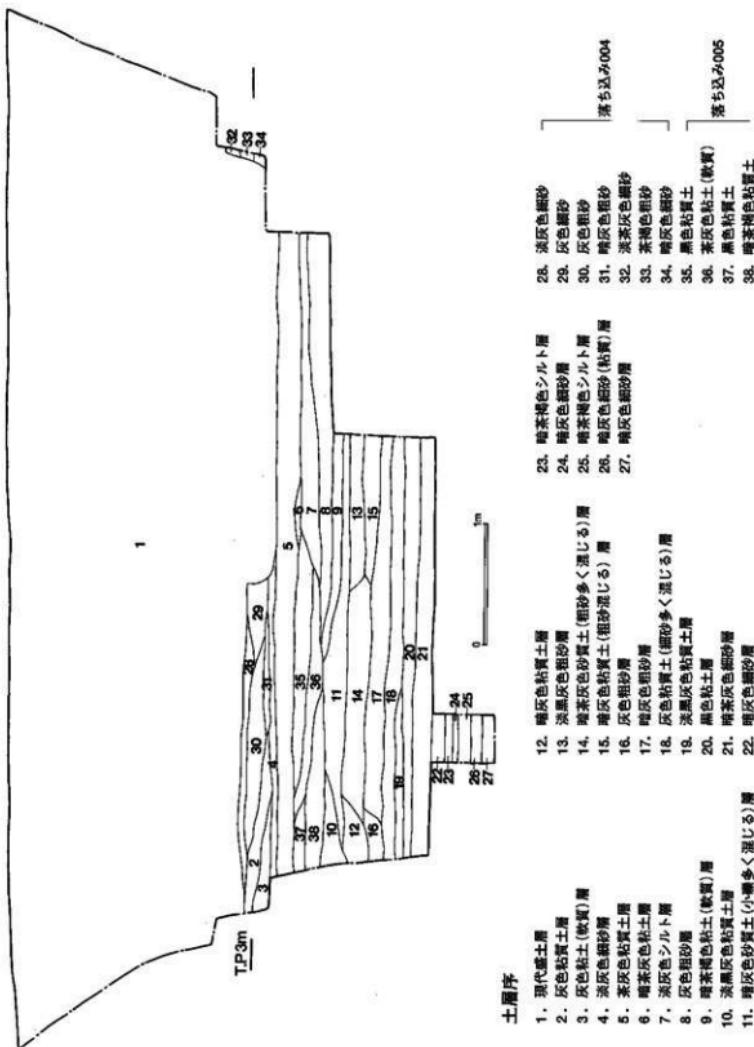
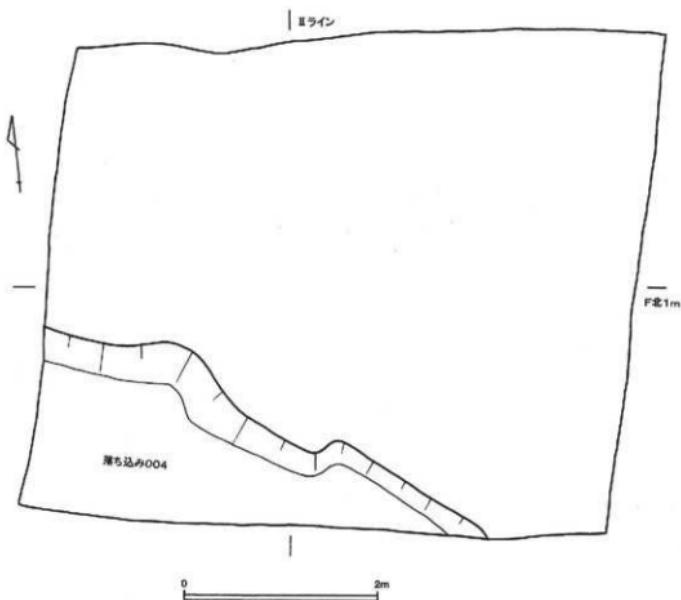


写真41 G3-1面（北から）



写真42 G5-1面（南から）





第65図 G5-1面平面図

込み004は、調査区南西部において落ち込み際のラインがおおむねN58°Wの方位をもってのび、南側へ22~31cmの深度で落ち込んで検出された。落ち込み埋土は灰色系の細砂・粗砂であったが、これに伴っての遺物は認められなかった。

[G 5-2面]

第2層・灰色粘土(軟質)層(第3層)下において淡灰色細砂層(第4層)をベース面(標高T.P約2.95~3m)として溝、ビット、土坑が検出された。溝は、南北方向に並行し

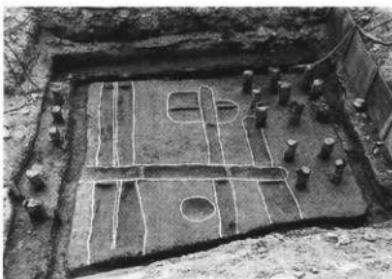
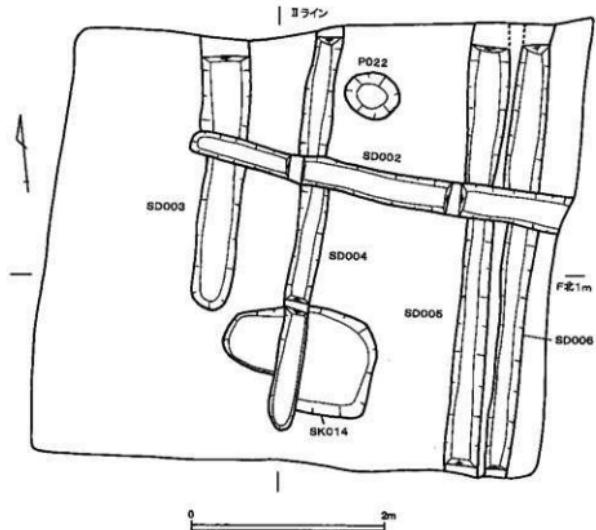


写真43 G5-2面 (北から)



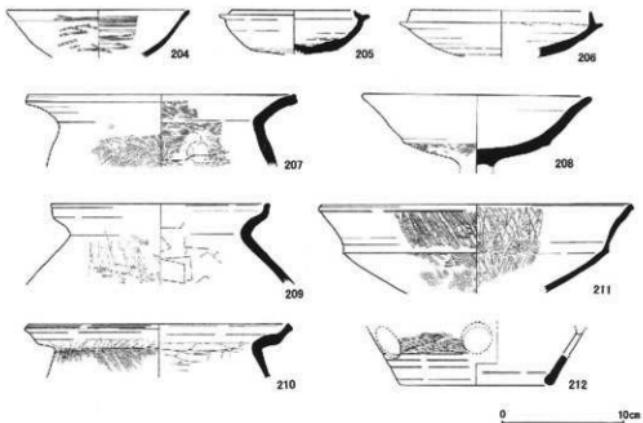
第66図 G5-2面平面図

てのびるものが4条（SD003～SD006）、そしてこれと直交気味に重複する東西方向のものが1条（SD002）認められた。各溝は幅30～50cm、深さおおむね5cm前後を測ったが、SD005・SD006については深い部分で10cm程度を測った。これら溝の方位は南北方向のものがN9°～12°Eを示し、東西方向のものがN73°Wとなり、東西方向のものが南北方向のものに対して方位が若干北側へ振れる。溝の埋土は、SD002が黒灰色粘土、他が黒灰色粘質土となる。

ピットと土坑については、ピットP022は径45～55cm、深さ約9cmを測り、埋土は黒灰色粘質土であった。また、土坑SK014は、SD004に重複される形で検出された。平面形はやや歪な形となるが、最大長約1.3m、深さ約9cmを測り、埋土は黒灰色粘土であった。

G5-2面に関わる遺物としては、遺構面上にて古墳時代から中世にかけての須恵器・土師器・瓦器の破片が数点検出されたのみである。このうち国化できたものとして瓦器碗（204）があり、内外面ともやや粗いミガキが施されている。

204は12世紀中頃のものとみられ、出土遺物の中でも下限時期にあたる。G5-2面の時期もおおむねその頃と推定されるが、このG5-2面については、検出遺構の内容とレベルからTA区検出の第IV面とたいへんよく合致し、中でも12世紀後半と考えられる条里地割関連の溝と



第67図 G5区出土遺物実測図

合う。このことから、G 5・2面については12世紀後半に相当するものと考えられる。

[G 5・3面]

茶灰色粘質土層（第5層）下において淡灰色シルト層（第7層）をベース面（標高T. P約2.6~2.7m）として落ち込み跡1か所が検出された。落ち込み005は、調査区の東側が落ち込む形で検出され、落ち込み際で深さ7~14cmを測り、落ち込み際のラインはおおむねN25°Eを示している。埋土については黒色粘土と茶灰色粘土を主体するものであった。

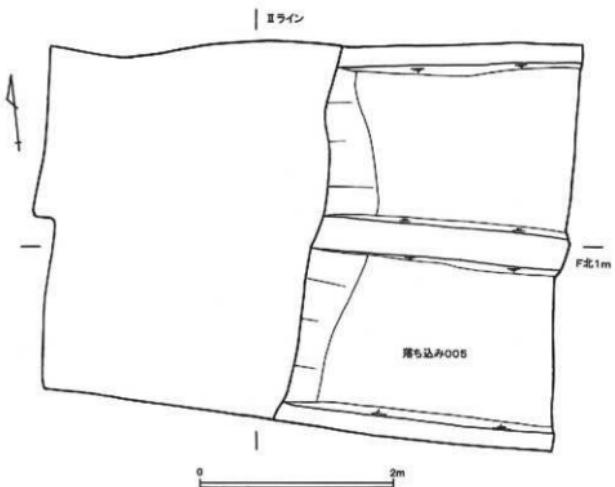
G 5・3面に関わる遺物としては、落ち込み005内にて古墳時代を中心とする土師器片・須恵器片が多く検出され、図化できたものとして205~208がある。205・206は須恵器杯身である。205は口径が小さく、立ち上がり部が内傾し、体部外面から内面にかけては回転ナデ、底部内面付近は後に不定方向にナデられている。また底部外面は回転ヘラ切り後にナデされている。206は底部外面を回転ヘラケズリ、他を回転ナデ調整されている。

207は、土師器壺である。口縁部は横ナデされるが内面にハケメが残る。体部は内外面ともハケ調整されている。器壁は厚く、口縁端部は端面をもつ。

208は、土師器高杯である。やや鈍い稜をもち口縁部がやや外反気味に開く。口縁部は



写真44 G5-3面（北から）



第68図 G5-3面平面図

内外面とも横ナデされ、底部内面はナデ、底部外面もナデられているがハケメが残る。

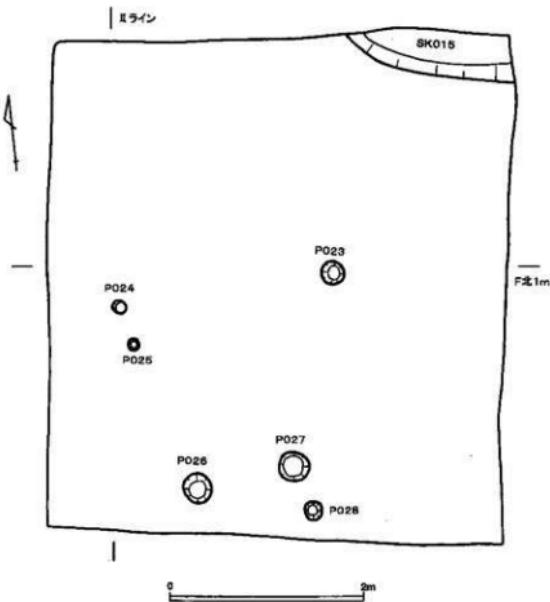
G 5・3面の時期としては、出土遺物の中でも下限時期とみられるものとして、205が7世紀前半のものであり、また部分的な残存のため明確ではないが、207がそれと同時期かそれより下るものかもしれない。しかし、固化できなかった遺物を含めてみても7世紀前半を明らかに下るものはみられないことから、G 5・3面の時期としてはおむね7世紀前半頃ではないかと考えられる。

#### [G 5・4面]

黒色粘土層（第20層）下において暗茶灰色細砂層（第21層）をベース面（標高T.P約1.7m）としてピット、土坑が検出された。ピットは6基検出され、P 0 2 4・P 0 2 5・P 0 2 8は径が7~12cmと小さく、P 0 2 3・P 0 2 6・P 0 2 7は径18~22cmを測った。深さは5~10cm程度であり、柱痕は認



写真45 G5-4面（北から）



第69図 G5-4面平面図

められなかった。土坑SK015は調査区北東隅で部分的に検出されたもので、検出部で深さ約8cmを測った。ピット、土坑ともに埋土として黒色粘土が認められた。

G5-4面と関わる遺物としては、遺構からの出土はなかったが、覆土層である第20層で弥生土器片を中心とする遺物が検出され、うち國化できたものとして弥生土器甕(209)がある。209は、受口状の口縁部をもち、口縁部は横ナデされ、体部内面は板ナデ、体部外面はタタキの後に板ナデされる。

G5-4面の時期としては、第20層出土遺物において弥生時代後期後葉のものとみられる土器片が中心に検出されたことから、当該期が遺構面の時期として考え得る。

この他、遺構を伴うものではなかったが、G5-3面以下よりG5-4面までの土層内において遺物の包含が認められた。灰色粗砂層(第8層)・暗茶褐色粘土(軟質)層(第9層)・淡黒灰色粘質土層(第10層)では古墳時代の土師器片を中心に古墳時代後期の須恵器片も含みつつ検出した。また、暗灰色砂質土(小礫多く混じる)層(第11層)～暗灰色粗砂層(第17層)においても須恵器片を含みつつ、布留式期の土師器片、弥生時代後期の弥生土器片が多く含ま

れていた。そして、灰色粘質土（細砂多く混じる）層（第18層）では、弥生時代後期の遺物が多く検出され、図化できたものが3点ある。

210は、受口状の口縁部をもつ弥生土器甕で、山城系のものではないかとみられる。口縁部は外側に開き、口縁部は横ナデされるが、口縁外面下半は板ナデされている。体部は残存部で外面はハケ調整、内面は板ナデされている。

211は、弥生土器高杯である。明確な屈曲部をもって口縁が外反気味に開く。内外面ともヘラミガキされ、口縁端部は横ナデされている。

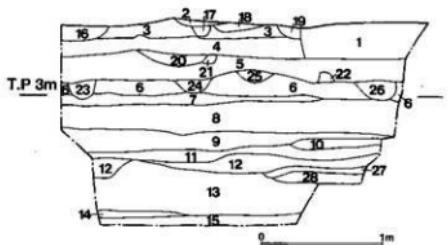
212は、鉢等の台部である。円形とみられる透孔が残存部において2か所認められる。外面には凹線がめぐり、外面上部はヘラミガキが施されている。第18層では、弥生時代後期の遺物が多く含まれていたが、212だけは弥生時代中期のものとなる。

以上、G5区検出の遺構・遺物についてみたが、各遺構面の時期については、G5-1面ではそれに関わる遺物の出土がなかったことから、その時期は不明であるが、次面のG5-2面は12世紀後半のものとみられ、G5-1面については12世紀後半以降のものと考えられる。また、G5-3面はおおむね7世紀前半頃とみられ、G5-4面については弥生時代後業に当たるのではないかと考えられる。そして、G5区遺構面とTA区検出遺構を対比すると、先述のように遺構面の内容とレベルからG5-2面がTA区第IV面に相当すると考えられる。また、G5-3面については、レベルと出土遺物の時期からTA区第VI面に相当する可能性がある。

#### (5) G6区【5遺構面を検出】

##### [G6-1面]

盛土層と旧耕土層を機械掘削し、土層断面図にはないが旧耕土層下の暗青灰色砂質土層を除去した段階で、青灰色砂質土（黄灰色砂混じる）層（第3層）をベース面（標高T.P約3.5m）として溝、土坑、ピットが検出された。溝は3条検出され、それぞれN10～



##### 土層序

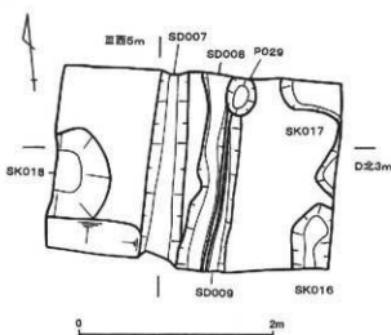
- |                            |                            |
|----------------------------|----------------------------|
| 1. 混乱                      | 15. 暗灰色砂(やや淡、やや粗)層         |
| 2. 旧耕土層                    | 16. 青灰色砂質土(黄色砂混じる) 層 SK016 |
| 3. 青灰色砂質土(黄灰色砂混じる)層        | 17. 黒灰色砂質土 SD009           |
| 4. 喰灰色砂質土(褐色混じる)層          | 18. 黒灰色砂質土 SD008           |
| 5. 灰色粘質土(やや暗、茶色がかる)層       | 19. 暗青灰色砂質土(黄灰色砂混じる) SD007 |
| 6. 青灰色砂・褐色砂層               | 20. 暗灰色砂質土 SD010           |
| 7. 青灰色シルト層                 | 21. 青灰色砂質土 SD011           |
| 8. 喰灰色粘質土・シルト層             | 22. 暗灰色粗砂                  |
| 9. 淡灰色砂(やや粗、少量の暗灰色シルト混じる)層 | 23. 灰色粘質土(やや暗) SD012       |
| 10. 灰色粗砂層                  | 24. 灰色粘質土(やや暗) SD013       |
| 11. 淡灰色砂(暗灰色シルトが層状に混じる)層   | 25. 灰色粘質土(やや暗) SD014       |
| 12. 灰色砂(やや粗)層              | 26. 灰色粘質土(やや暗) SD015       |
| 13. 喰灰色粘土層                 | 27. 暗灰色シルト 落ち込み007         |
| 14. 暗灰色粘土(やや淡)層            |                            |

第70図 G6区南壁土層断面図

13° E の方位をもってほぼ平行してのびていた。SD007は、幅30~40cm、深さ約10cmを測り、埋土は暗青灰色砂質土を主体とするものであった。SD008は、幅20~30cm、深さ約7cmを測り、SD009は、幅10~20cm、深さ約9cmを測った。埋土はともに黒灰色砂質土となる。また、ピットP029がSD008・SD009に重複して検出された。P029は長径35cm以上、短径30cm、深さ約5cmを測り、埋土は暗青灰色砂質土を主体とするものであった。これらの溝は、条里地割の方位とほぼ合う。

土坑は3基検出されたが、すべて部分的な検出で全形は明らかでない。SK016は、検出部分で深さ約10cmを測り、埋土は青灰色砂質土を主体とするものであった。SK017は、深さ約10cm、埋土は暗青灰色砂質土を主体とし、SK018は、深さ約60cmと深く、埋土は黄灰色土に暗青灰色砂質土がブロック状に混じるものであった。

G6-1面に関連する遺物をみると、遺構出土の遺物で図化できたものとして213~217



第71図 G6-1面平面図

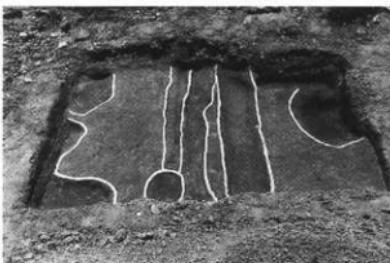
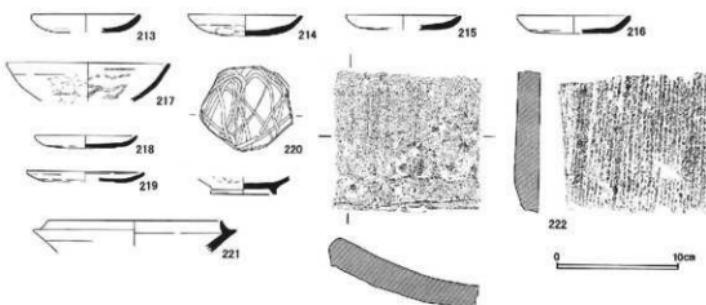


写真46 G6-1面（北から）



第72図 G6区出土遺物実測図

がある。213はSD007、214はSD008、215～217はSK018出土のものである。213～216は土師器皿であり、いずれも口縁部を横ナデ、底部内面はナデ調整されるが、底部外面については、213はナデ、214・216は指オサエ、215は未調整となる。217は瓦器椀で、内面のミガキは粗く、外面には施されていない。

これらの遺物は、いずれも13世紀中頃のものとみられるが、図化できなかつた他のG6-1面出土遺物についてもほぼ同時期のものが多かった。しかし、SD008・SD009からは近世以降のものとみられる瓦片が出土していることから、G6-1面については近世以降のものであると考えられる。

#### [G6-2面]

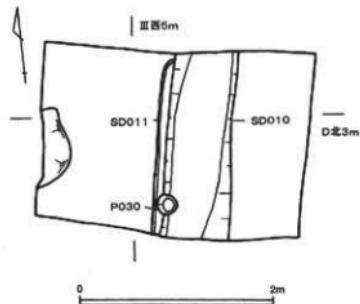
暗灰色砂質土（褐色混じる）層（第4層）下において灰色粘質土（やや暗、茶色がかる）層（第5層）をベース面（標高T.P約3.25～3.3m）として溝、ピットが検出された。溝は、SD010がSD011を重複する形で2条検出され、ともにN10°Eの方位を示し、条里地割の方位とほぼ合う。SD010は、幅65～70cm、深さ3～5cmを測り、埋土は暗灰色砂質土となる。SD011は、その幅は不明であるが、深さは検出部分で1cm程度とごく浅いものであった。埋土は青灰色砂質土となる。

また、ピットP030は、2条の溝に重複して検出された。径約20cm、深さ約6cmを測り、埋土は灰白色砂が混じる灰色砂質土であった。

G6-2面に関連する遺物をみると、図化できたのはSD010出土の土師器皿（218）1点のみであった。218は、口縁部を横ナデ、底部外面は指オサエ・ナデ、底部内面はナデ調整によるもので、13世紀中頃のものとみられる。この他、図化できなかつたが、SD010内よりおおむね13世紀代のものとみられる土師器片・瓦器片が検出された。

#### [G6-3面]

第5層下において青灰色砂・橙灰色砂層（第6層）をベース面（標高T.P約3.1～3.15m）



第73図 G6-2面平面図



写真47 G6-2面（北から）

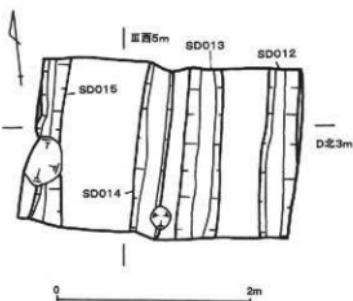
として溝が4条検出された。溝は条里地割とほぼ合うN10°~13°Eの方位をもってほぼ平行してのびていた。溝の幅はおおむね30~40cm程度で、深さはSD012・SD013で約14cm、SD014で約11cm、SD015で約19cmを測った。また、溝の埋土はやや暗い灰色粘質土であった。

G-3面に関連する遺物としては、図化できたものとして覆土層となる第5層出土の219・220がある。219は土師器皿である。口縁部は横ナデされ、口縁端部が少しつまみ上げられている。底部外面は指オサエ、底部内面はナデ調整されている。220は瓦器椀の底部である。残存部において内面にミガキが施されるが、外面には認められない。高台はハの字状に開くしっかりしたものがつく。219は13世紀中頃、220は12世紀後半のものとみられる。この他、図化できなかったが、SD012・SD013・SD015から少量の土師器片、須恵器片が検出された。これらは細片のため明確なことはいえないが、12世紀後半から13世紀中頃までの範囲に入るのではないかとみられる土師器皿片がいくつかあり、G-3面の時期もその範囲の中に入るものと考えられる。

#### [G-4面]

淡灰色砂（暗灰色シルトが層状に混じる）層（第11層）下において灰色砂（やや粗）層（第12層）をベース面（標高T、P約2.5m）として落ち込み跡が1か所検出された。落ち込み006は、調査区の北側に約5~8cmの深さで落ち込み、その落ち込み肩はおおむねN83°Wの方位でのびていた。落ち込み内の埋土は淡灰色砂が混じる暗灰色シルトであった。

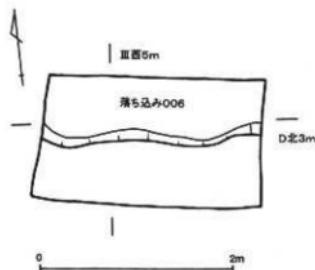
なお、G-4面に関連しての遺物は認められず、その明確な時期は不明である。



第74図 G-3面平面図



写真48 G-3面（北から）



第75図 G-4面平面図

[G 6-5面]

第12層下において暗灰色粘土層（第13層）をベース面（標高T. P約2.35m）として落ち込み跡が1か所検出された。落ち込み007は、調査区の西側に約5~9cmの深さで落ち込み、その落ち込み肩はおおむねN10°Eの方位でのびていた。落ち込み内の埋土は上位に暗灰色シルト、下位に淡灰色砂が堆積していた。

なお、G 6-5面に関連しての遺物は認められず、その明確な時期は不明である。

以上、G 6区においては、5面の遺構面が検出された。G 6-1面は近世以降、G 6-2面は13世紀中頃の時期が想定でき、G 6-3面についても12世紀後半から13世紀中頃までの範囲に入るものと考えられる。そして、これらをTA区と対比すると、G 6-2面については、遺構面のレベルがほぼ合うこと、そして条里地割方位とほぼ同じの南北方向の溝がみられたことなどから、TA区第I面に相当するのではないかと考えられる。また、G 6-3面については、条里地割とほぼ合う方位をもって4条の溝が平行してのびる状況と、遺構ベース層が青灰色系の砂層となる共通性から、レベルは若干G 6-3面の方が高くなるが、おそらくTA区第IV面に相当するであろうと考えられ、この点からすると、G 6-3面は12世紀後半に相当するものとみられる。

さて、G 6-4面とG 6-5面ではそれに関連する遺物の出土がないことから、その時期は明確でないが、G 6-4面より上位の暗灰色粘土・シルト層（第8層）において土師器細片とともに古墳時代後期の須恵器杯身（221）が認められた。また、G 6-5面より下位層においても古墳時代後期のものとみられる須恵器杯身片の出土があった。このことからG 6-4面とG 6-5面は、古墳時代後期に近い時期のものである可能性が考えられる。



写真49 G6-4面 (南西から)



第76図 G6-5面平面図



写真50 G6-5面 (西から)

なお、旧耕土層中にではあるが、平安時代のものとみられる平瓦(222)の出土があった。平瓦は1枚作りで、凸面に縄目、凹面はナデ消しされているがわずかに布目が残る。側面は指サエとナデ、狭端部はヘラ切りで整えられている。

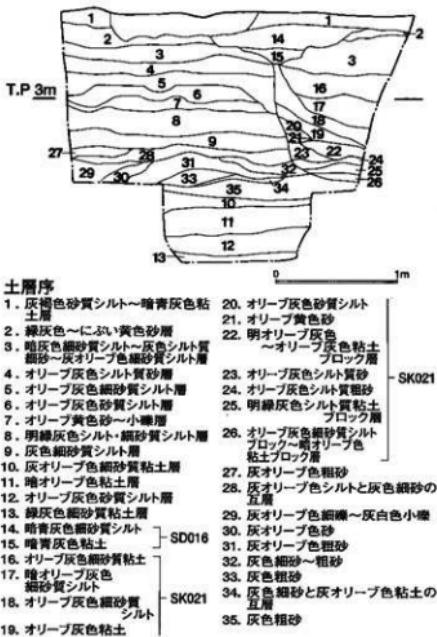
#### (6) G7区【5遺構面を検出】

##### [G7-1面]

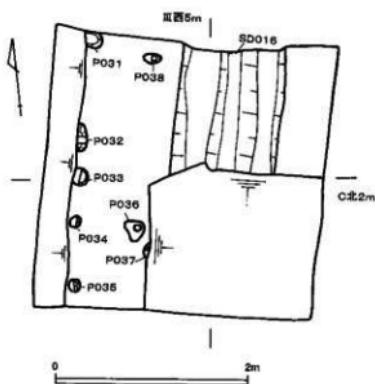
灰褐色砂質シルト～暗青灰色粘土層(第1層)下において緑灰色～ぶい黄色砂層(第2層)をベース面(標高T.P約3.5～3.6m)として溝、ピットが検出された。溝SD016は段を有して掘り込まれ、幅約1.1m、深さ約30cmを測った。その方位はN12°Eを示していた。暗青灰色のシルトと粘土が埋土として認められた。

ピットについては、径が10～20cm、深さ5～10cm程度のものが8基検出された。このうち、P031～P035が調査区の西端でSD016とほぼ同じ方位をもって並ぶのが確認できた。ピットの埋土は灰色系のシルトを主とするものであった。

G7-1面に関しての遺物は、SD016内から近世以降の陶器・瓦片等が出土した。224は土製品で一見土馬のような動物の足をかたどったもののように見えるが、その形状や用途、時期は不明である。また、覆土層である第1層からは、近世末頃のものとみられる鶴笛(223)が1点出土した。



第77図 G7区北壁土層断面図



第78図 G7-1面平面図

[G 7-2面]

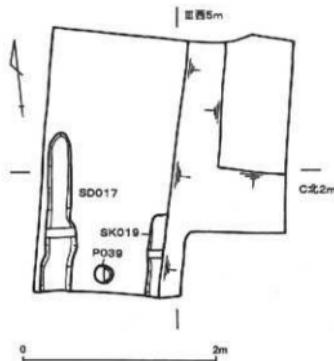
暗灰色細砂質シルト～灰色シルト質細砂～灰オリーブ色細砂質シルト層（第3層）下においてオリーブ灰色シルト質砂層（第4層）をベース面（標高T、P約3.3～3.4m）として溝、ピット、土坑が検出された。

溝は1条検出され、SD017は、幅25～32cm、深さ約5cmを測り、条里地割とほぼ合うN8°Eの方位をもってのびていた。ピットは1基検出され、P039は、径約20cm、深さ約7cmを測った。また、土坑SK019は、G7-1面のSD016によって削平されており、全形は明らかでなく溝である可能性もある。これら遺構の埋土はいずれも灰色砂質シルトであった。

なお、次下面のG7-3面で確認された遺構のうち、5基の土坑と1基のピットが土層観察と重複関係からG7-2面に属するものであることがわかった。ここで先に、G7-3面で確認されたG7-2面相当の土坑、ピットについてみると、SK020は検出部分で最大長約1.4m、深さ約57cmを測った。SK021は形状は不明であるが、北壁断面の観察から深さは約90cmであった。この他の土坑・ピットは全形が不明であるが、検出部分でSK022・SK023は深さ10cm前後、P040は深さ約5cmを測った。ここでみられた土坑の埋土はオリーブ灰色系のシルトまたは砂が主体となるものであり、ピットP040については暗緑色の砂質シルトであった。これらの遺構の埋土は、G7-2面のベース層となる第4層とよく似た土質であったことから、G7-2面



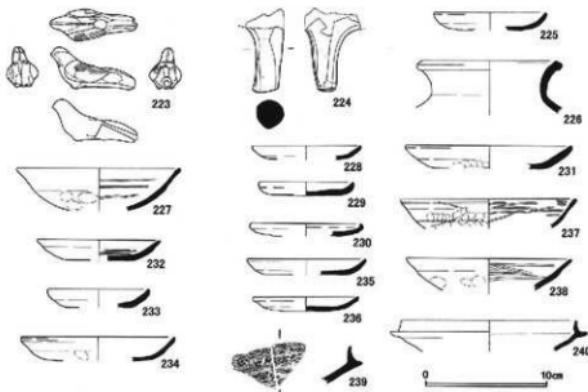
写真51 G7-1面 (北から)



第79図 G7-2面平面図



写真52 G7-2面 (北から)



第80図 G7区出土遺物実測図

で見落としたものと考えられる。

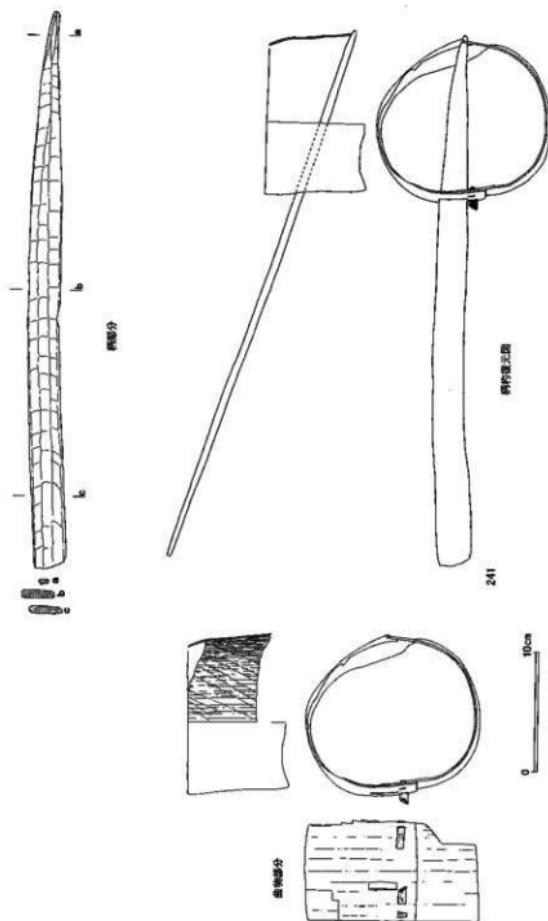
G 7-2面に関連する遺物としては、G 7-2面上で検出された遺構からの出土遺物で図化できたものはないが、SD 0 1 7内からはミガキが粗く、高台を粗雑に貼り付けた瓦器椀の細片がみられた。また、図化できたものとして、覆土層の第3層から出土した土師器皿(225)がある。口縁は1段ナデされ、口縁端部も横ナデされるが、明確な面取りとはなっていないものである。

この他、G 7-3面において確認したG 7-2面相当遺構の出土遺物ではいくつか図化できたものがある。226はSK 0 2 0出土の須恵器壺の口縁部である。回転ナデ調整されているが、外面にタタキのような痕跡がわずかに認められる。227~230・241はSK 0 2 1出土のものである。227は瓦器椀である。内面のミガキは粗く、外面にミガキは施されていない。228~230は土師器皿である。228は口縁部が横ナデされ、口縁端部がごくわずかに上昇している。229は口縁部が短く立ち上がるものである。230は口縁部が内側に折り曲げられ、いわゆるコースター形の皿である。231はSK 0 2 3出土の土師器皿である。口縁は横ナデされ、外側に大きく開く。241は柄杓である。底板はなかったが、柄がついた状態で検出された。口径は12~14cm、高さ約8cmを測り、柄の長さは46cmであった。柄の一端をと



写真53 G7-2面相当SK021内柄杓 (241)

第81圖 G7区SK021出土柄杓測量圖



がらせ、それを曲物に差し込まれていた。

これらの遺物の時期をみると、226の須恵器壺については古墳時代頃のものとみられるが、他はおおむね13世紀中～後半にかけてのものとみられる。また、226を検出したSK020からも、図化できなかったが、13世紀中～後半のものとみられる瓦器腕片が出土している。

#### [G 7-3面]

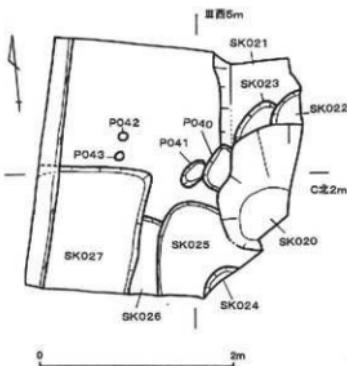
第4層下においてオリーブ灰色細砂質シルト層（第5層）をベース面（標高T. P約3.2m）として土坑、ピットが検出された。前述したように、この遺構面では上位面であるG 7-2面で見落とした遺構を確認することとなったが、ここではこのG 7-3面に属するであろう遺構についてみる。

SK025とSK027は大型の土坑である。SK025は検出部分で最大長約1mを測り、深さは約4cmであった。SK027は検出部分で最大長約1.3m、深さ約6cmを測った。この他、SK024は深さ約4cm、SK026は深さ約2cmと検出部分ではあるが浅いものであった。またピットについては、P041は深さ2～3cm、P042・P04

3は深さ8～10cmを測り、柱痕などは認められなかった。これら遺構埋土については、オリーブ灰色か緑灰色系のシルトを主体とするものであった。

G 7-3面に関連する遺物をみると、232～234は覆土層である第4層出土のものである。232は、瓦器皿である。口縁がやや外側に開き、内面にはまばらにミガキが施されている。233・234は、土師器皿である。233は口縁部が横ナデされている。234は口縁部が1段ナデされ、口縁端部が面取りされている。

235～238は遺構出土の遺物である。235・236はSK027出土の土師器皿である。ともに口縁部が1段ナデされ、口縁端部が面取りされている。237はSK025出土、238はSK026出土の瓦器腕である。内面にやや粗くミガキが施されるが、外面にミガキは認められない。これら遺物の時期をみると、おおむね13世紀前半～中頃のものとみられるが、図化できなかった



第82図 G7-3面平面図



写真54 G7-3面（南から）

遺物も含めてみると、遺物の時期相は上位面のG 7-2面とあまり大きく変わらないようであり、相対的にG 7-3面がやや古いという様相である。

#### [G 7-4面]

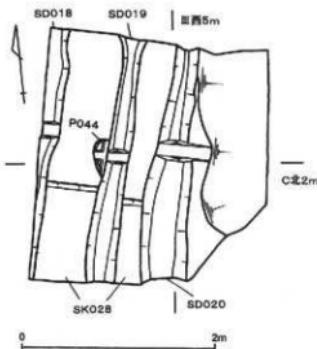
第5層下においてオリーブ灰色砂質シルト層（第6層）をベース面（標高T. P約3.1m）として溝、土坑、ピットが検出された。溝は3条検出され、N14~16°Eの方位をもって平行してのびていた。SD019は幅18~30cm、深さ約10cm、SD020は幅20~47cm、深さ約18cmを測った。またSD018は検出部分で深さ約7cmを測った。これら溝の埋土はオリーブ灰色系の粘土を主体とするものであった。これらの溝は条里地割の方位よりもやや東側へ傾いてのびていたが、限られた調査区の範囲の中での検出であることを考慮すると、これは部分的なずれであり、おそらくこれらの溝も条里地割に伴うものと考えられる。

土坑SK028については検出部分で深さ約5cmを測り、埋土はオリーブ灰色シルトであった。ピットP044は検出部分で深さ3cm程度の浅いもので、埋土は暗オリーブ灰色シルトであった。

G 7-4面に関連しての遺物については少なく細片ばかりで図化できるものはなかったが、第5層からは土師器、瓦器、須恵器の破片がみられ、このうち瓦器片をみると、ミガキが内外面とともに施されているものであった。上位のG 7-3面と比較して時期がやや古い様相を示す。

#### [G 7-5面]

灰色細砂質シルト層（第9層）下（標高T. P約2.6m）において自然流路の埋土と考えられる砂層の堆積が確認された。当初は2条の自然流路（SD021・SD022）として検出したが、土層観察により第9層と第10層（灰オリーブ色細砂質粘土層）の間の堆積層（第27層～第35層・層厚約40cm）が自然流路の埋土であり、SD021とSD022はその自然流路の部分的な埋土をとらえてしまったようである。



第83図 G7-4面平面図

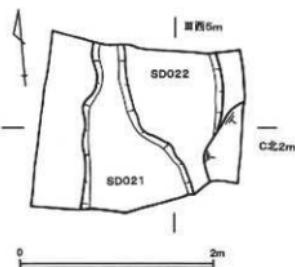


写真55 G7-4面（南から）

この自然流路に関連しての遺物は、第27層～第35層中において古墳時代の土師器、須恵器の破片がみられた。固化できたものでは239・240の須恵器杯身がある。ともに残存部分で内外面とも回転ナデ調整されている。また、239はS D 0 2 1としてとらえた箇所から検出したものであるが、外面にヘラ記号とみられる線刻がある。これらは6世紀後半のもので、第27層～第35層からの遺物ではおおむね下限時期のものとなる。

以上、G 7区においては5面の遺構面が検出された。G 7-1面は近世以降の新しい時期のものとみられる。G 7-2面とG 7-3面についてはおおむね13世紀中頃から後半にかけての時期が想定され、G 7-3面が相対的に若干古くなる。G 7-4面については遺物が細片ばかりで明確な時期をとらえにくくが、覆土層である第5層において内外面にミガキが施されている瓦器片が認められ、おそらく12世紀後半に相当するものではないかと考えられる。G 7-5面において検出した自然流路については古墳時代後期のものとみられる。そして、これらをTA区と対比すると、G 7-2面は条里方位に合う溝の検出や遺構面のレベルからTA区第I面に相当するものと考えられる。また、G 7-4面については、方位に若干のずれがあるものの条里地割に伴うものであろう溝と遺構面のレベルからみてTA区第IV面に相当し、中でも12世紀後半のものに相当するのではないかと考えられる。また、G 7-5面については、出土遺物の時期と遺構面のレベルからTA区第VI面に相当する可能性がある。

なお、G 7-5面より下位の第10層～第12層においても少量ながら古墳時代の土師器もしくは弥生土器の破片を含んでおり、G 7-5面下にも遺構が存在する可能性がある。



第84図 G7-5面平面図



写真56 G7-5面（南から）

### (7) G8区【4遺構面を検出】

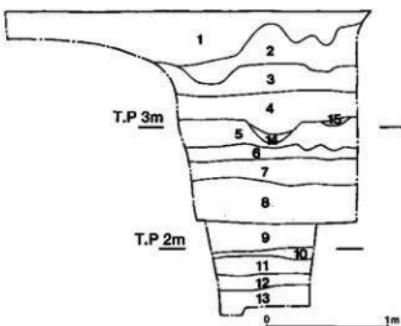
#### [G8-1面]

旧耕土層（第2層）下において暗オリーブ灰色砂質シルトからなる土層（第3層）をベース面（標高T.P約3.5m）として溝、ピットが検出された。溝SD023は幅30~42cm、深さ約14cmを測り、N10°Eの方位をもってのびていた。ピットは2基検出され、うち1基（P046）はわずかにその痕跡をとどめるのみであったが、もう1基（P045）では柱痕が認められた。

これらの遺構からは明確な遺物の出土はなかったが、この遺構面は近年の旧耕土層下で認められたことと、SD023と旧耕土層の土質がほぼ同じであったことから、これらの遺構についてはおそらく近現代のものと考えられる。

#### [G8-2面]

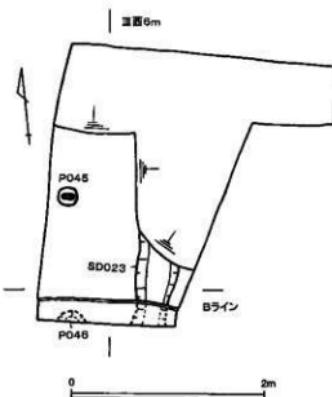
暗オリーブ色細砂質シルト層（第4層）下において灰色砂~粗砂・オリーブ灰色細砂質シルト層（第5層）をベース面（標高T.P約3.05m）として溝が3条検出された。SD025は幅25~35cm、深さ10~15cm、SD026は幅15~25cm、深さ3~5cmを測り、SD024は部分的な検出であったが、幅約30cm、深さ約3cmを測った。SD024・SD025は暗オリーブ灰色の粘土、SD026はオリーブ灰色のシルトが埋土として認められた。これらの溝はほぼ平行するようにのびていたが、その方位はN17~23°Eを示し、



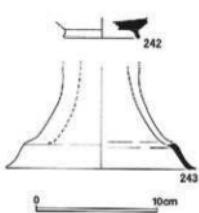
土層序

- |   |                          |
|---|--------------------------|
| 1. 現代盛土層  | 8. 灰白色・灰色砂~小砾層           |
| 2. 旧耕土層   | 9. 嗅オリーブ色粘土層             |
| 3. 嗥オリーブ灰色砂質シルト<br>～淡黄色砂～明緑灰色シルト<br>～オリーブ灰色シルト質砂層 | 10. オリーブ黒色粘土層            |
| 4. 嗥オリーブ色細砂質シルト層                                  | 11. 黄オリーブ色細砂質粘土層         |
| 5. 灰色砂～粗砂・オリーブ灰色<br>細砂質シルト層                       | 12. 青灰色砂質粘土層             |
| 6. オリーブ灰色細砂質シルト<br>～砂層                            | 13. 青灰色粘土層               |
| 7. 嗥オリーブ色粘土層                                      | 14. 嗥オリーブ色細砂質粘土<br>SD025 |
|   | 15. オリーブ灰色砂質シルト<br>SD026 |

第85図 G8区南壁土層断面図



第86図 G8-1面平面図



第88図 G8面出土遺物実測図



写真57 G8-1面（北から）



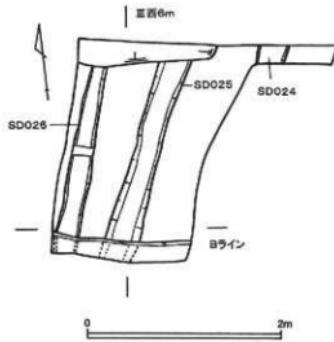
写真58 G8-2面（東から）

条里地割の方位よりやや東側に傾いていた。

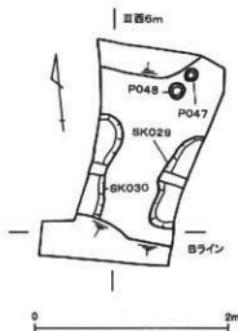
G 8 - 2 面に関連しての遺物で図化できたものは、覆土層である第 4 層出土の縄軸陶器片 (242) 1 点のみであった。242は、縄軸陶器楕か皿の底部片である。素地は硬質に焼成され、暗緑色の軸がかかる。高台は貼付輪高台となる。豊付から高台裏まで施釉されており、東海系のものとみられる。この他に図化はできなかったが、第 4 層からは土師器、瓦器、須恵器の破片が少量検出され、その中に 12~13世紀にかけてのものとみられる瓦器片が含まれていた。

#### [G 8-3 面]

暗オリーブ色粘土層（第 7 層）下において灰白色・灰色砂～小砾層（第 8 層）をベース面（標高T. P約 2.5~2.55m）として土坑、ピットが検出された。土坑



第87図 G8-2面平面図



第88図 G8-3面平面図

は部分的に2基検出されたものであるが、検出部分でSK029は最大長約1m、深さ約4cmを測り、SK030は最大長1.1m以上、深さ約3cmを測った。埋土はともに灰色の粗砂であった。

ピットは2基検出され、P047は径約12cm、P048は径約15cmで、ともに深さが3cm程度と浅く、埋土は灰色の砂質シルトであった。

G8-3面に関連しての遺物で図化できたものはなかったが、覆土層である第7層および遺構内からは古墳時代のものとみられる土師器片・須恵器片が出土した。

#### [G8-4面]

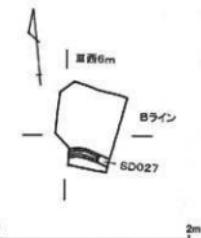
青灰色砂質粘土層（第12層）下において青灰色粘土層（第13層）をベース面（標高約T. P約1.75m）として溝が1条検出された。SD027は、幅約10cm、深さ6～9cmを測り、カーブして東西方向にのびていた。埋土は灰オリーブ色の砂質粘土であった。

G8-4面に関連しての遺物については、覆土層および遺構からその出土はなかった。

以上、G8区においては4面の遺構面が検出されたが、遺構は検出されなかつたものの遺物を包含する土層がいくつか認められた。第3層では13世紀中頃のものではないかとみられる土師器片・瓦器片が検出され、第5層では平安時代以前のものと目される土師器片・須恵器片が検出された。また、第8層からの遺物の出土は多く、古墳時代の土師器片・須恵器片がみられた。その中で図化できたのが243の須恵器高杯である。長脚で3方に方形の透窓があると推定されるもので、この高杯が第8層出土遺物のおおむねの下限時期を示し、古墳時代後期に相当すると考えられる。この他、第9～10層においても土師器もしくは弥生土器の破片が含まれていた。このことから、今回検出した4遺構面以外にもこれら包含層に伴って遺



写真59 G8-3面（西から）



第90図 G8-4面平面図



写真60 G8-4面（東から）

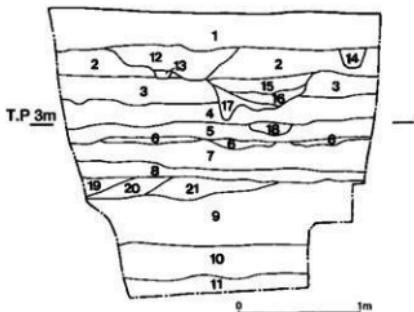
構が存在する可能性が考えられる。

さて、各遺構面の時期をみると、G 8-1面は近現代のものであり、G 8-2面は12~13世紀のもの、G 8-3面については遺構内から古墳時代のものとみられる土器片・須恵器片が出土していることと、その遺構ベース層となる第8層から古墳時代後期の遺物が検出されていることから、この遺構面も古墳時代後期に相当するものと考えられる。また、G 8-4面については関連する遺物の出土がなく、明確な時期は不明であるが、上位層である第9~10層の出土遺物をみると、古墳時代前期以前のものではないかと推定される。そして、これらをTA区と対比すると、G 8-2面が、遺構面のレベルと条里方位とずれるものの平行して溝がのびるという状況から、TA区第IV面に相当するのではないかと考えられる。また、G 8-3面については、遺構面のレベルと想定される時期からTA区第VI面に相当する可能性が考えられる。

#### (8) G9区【5遺構面を検出】

##### 【G 9-1面】

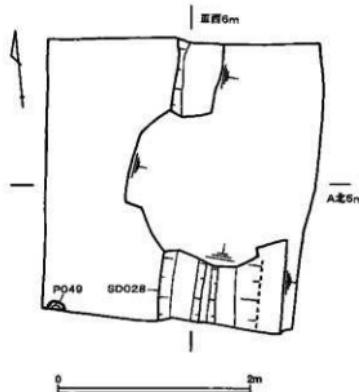
旧耕土層（第1層）下において灰色～青灰色細砂質シルト～黄色粗砂層（第2層）をベース面（標高T.P約3.6m）として溝、ピットが検出された。溝SD028は幅約1m、深さ25cm程度を測り、段を有して掘られ、おおむねN10°Eの方針をもってのびていた。また、ピットP049は径22cm、



##### 土層序

- |  |                                  |
|--|----------------------------------|
| 1. 旧耕土層  | 11. 緑灰色細砂質粘土層                    |
| 2. 灰色～青灰色細砂質シルト<br>～黄色粗砂層                          | 12. 喀青灰色粘質シルト<br>～オリーブ黄色細砂の互層    |
| 3. オリーブ灰色細砂質シルト<br>～砂質シルト層                         | 13. 喀青灰色細砂質シルト                   |
| 4. オリーブ灰色細砂質粘土層                                    | 14. 喀青灰色細砂質粘土                    |
| 5. 緑灰色シルト～細砂質シルト層                                  | 15. 喀灰灰色粘土（反オリーブ色<br>砂がロック状で混じる） |
| 6. 灰色砂層  | 16. 灰色シルト（オリーブ色<br>砂がロック状で混じる）   |
| 7. オリーブ灰色細砂質粘土<br>～オリーブ黄色粗砂層                       | 17. 青灰色細砂質シルト                    |
| 8. オリーブ灰色粘土層                                       | 18. 紫灰色粘土                        |
| 9. 灰色粗砂～灰色シルト質粗砂<br>～灰オリーブ色細砂質粘土<br>～灰オリーブ色細砂質シルト層 | 19. 灰色シルト質粗砂                     |
| 10. 灰色小礫～粗砂  | 20. 灰色シルト質粗砂                     |
| 11. 喀オリーブ色粘土層                                      | 21. 灰色シルト質粗砂                     |

第91図 G9区南壁土層断面図



第92図 G9-1面平面図

深さ18cmを測った。ともにその埋土は旧耕土（近現代）とほぼ同質の暗青灰色の粘質土を主体とするものであり、G 9-1面は近現代のものと考えられる。

#### [G 9-2面]

第2層下においてオリーブ灰色細砂質シルト～砂質シルト層（第3層）をベース面（標高T.P約3.4～3.45m）として溝、落ち込み跡、ピットが検出された。溝SD029は幅65～95cm、深さ15～25cmを測り、おおむねN3°Eの方位をもってのびていた。埋土は灰色系の粘土とシルトを主体とするものであった。

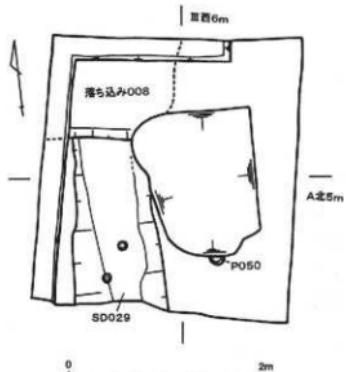
落ち込み008は、調査区の北西部が落ち込む形で認められたものである。その深さは約5cmを測り、上位に明緑灰色シルト、下位にオリーブ黄色粗砂～小礫が埋土として認められ、自然流路の可能性がある。

ピットP050は、検出部分で径約15cm、深さ3cmを測り、埋土は暗青灰色砂質シルトであった。

G 9-2面に関連しての遺物としては、



写真61 G9-1面 (南から)



第93図 G9-2面平面図



写真63 G9-2面SD029内土師器皿  
(右: 245、左: 246)



写真62 G9-2面 (北から)

244～246がSD029、247が落ち込み008出土のものである。244～246は土師器皿である。244は、口縁部が1段ナデされ、底部外面は指オサエのままで残る。口縁部に煤がつくので灯明皿として使われたとみられるが、焼成後底部に孔が1か所穿たれており、その意味するところ

は不明である。245は、口縁部が軽く横ナデされ、底部外面は指オサエの後ナデされている。また、246は、口縁部が1段ナデされ、底部外面は指オサエのままで残る。245と246は完形のものである。

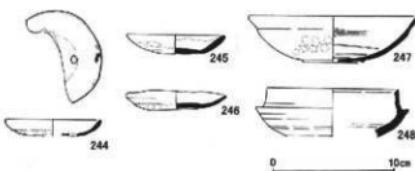
247は、瓦器椀である。内面はやや粗なミガキが施されているが、外面にミガキは認められない。また、高台は粗雑に貼り付けられている。

この他、図化しなかったが、遺構内出土遺物をみると、上記のものと同時期のものとみられる土師器片や瓦器片が下限時期の遺物として認められ、G9-2面の時期としては、おおむね13世紀後半に相当するものと考えられる。

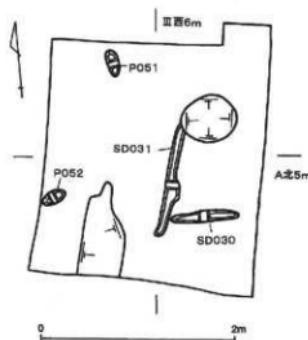
#### [G9-3面]

第3層下においてオリーブ灰色細砂質粘土層（第4層）をベース面（標高T.P約3.22m）として溝、ピットが検出された。溝SD031は、検出部分で長さ1.2m、幅8～15cm、深さ約2cmを測り、N17°Eの方位をもってのびていた。SD030は、長さ70cm、幅約10cm、深さ2～4cmを測り、ほぼ磁北と直交する方位でのびていた。これらの埋土はオリーブ灰色のシルト質土を主体とするものであった。

ピットP051とP052は、ともに長径約27cm、短径約12cm、深さ約4cmを



第94図 G9区出土遺物実測図



第95図 G9-3面平面図



写真64 G9-3面（北から）

測り、埋土は灰色砂であった。

G 9-3面に関連しての遺物としては、図化できたものはないが、遺構内からの出土ではなく、覆土層である第3層で13世紀代のものとみられる土師器片・瓦器片が検出された。

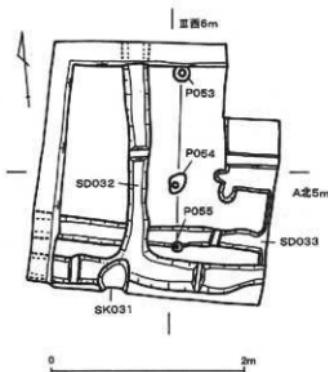
#### [G 9-4面]

第4層において緑灰色シルト～細砂質シルト層（第5層）をベース面（標高T.P約3.0～3.05m）として溝、ピット、土坑が検出された。溝SD032・SD033は、それぞれ東西方向と南北方向にのびる溝が交叉する形で、SD032がSD033に重複して検出された。SD032は、幅18～30cmで、深さは南北方向のもので約10cm、東西方向のもので3～5cmを測り、SD033は、幅18～25cmで、深さは4～6cmを測った。その方位は両者とも東西方向のものでおおむねN $80^{\circ}$ Wで平行してのびていたが、南北方向については、SD032でN $5^{\circ}$ E、SD033でN $12^{\circ}$ Eとなる。南北方向については方位がややずれるが、両者の溝ともおおむね条里地割と合うものである。埋土はオリーブ灰色のシルト質砂であった。

ピットは3基（P053・P054・P055）検出され、それぞれ柱痕（径7～8cm）が認められ、柱材とみられる有機物が残存していた。P053は径約16cm、深さ約17cm、P054は径約16～24cm、深さ約10cm、P055は径約8cm、深さ約5cmを測り、掘り方の埋土は灰褐色粘土（腐植質）であった。また距離は一定ではないが、これらのピットはN $7^{\circ}$ Eの方位をもって並んでいた。これも条里地割に沿うものと考えられる。

土坑SK031は、検出部分で最大長約35cm、深さ約6cmを測った。埋土は紫灰色の粘土を主体とするものであった。

G 9-4面に関連しての遺物としては、SD032・SD033において土師器・須恵器の細片が少量検出されたが、図化ができ、時期を明確に特定できるものはなかった。



第96図 G9-4面平面図



写真65 G9-4面（北から）



第97図 G9-5面平面図

[G 9-5 面]

オリーブ灰色粘土層（第8層）下において灰色系の粗砂や粘土等からなる第9層をベース面（標高T. P約2.55m）として自然流路とみられる溝が1条検出された。SD034は、確認できた範囲で幅60cm以上、深さ12～16cmを測り、磁北よりやや西側に傾いた方向（おおむねN $17^{\circ}$  W）でのび、北側底面が南側より深くなることから、南側から北側へと水が流れていたと考えられる。埋土は、灰色の細砂および粗砂を主体とするものであった。

G 9-5面に関連しての遺物としては、固化できたものとしてSD034出土の木製品（249）がある。249は剣形の木製品であるが、茎部分はしっかりと削り出されているものの、先端部分については加工が途中で止められたかのようにシャープさに欠ける。この他、土器類について固化できたものはなかったが、SD034内から古墳時代の上師器・須恵器の破片が多く出土し、下限時期のものとしては古墳時代後期に属するとみられる須恵器杯片などがあった。おそらく、G 9-5面は古墳時代後期に相当するものと考えられる。

以上、G 9区においては5面の遺構面が検出された。G 9-1面は近現代、G 9-2面は13世紀後半、G 9-3面はおおむね13世紀代、G 9-5面は古墳時代後期に相当するものと考えられる。また、G 9-4面については時期を明確に特定できる遺物の出土はなかったが、細片ながら検出された土師器片の質感からすると古代から中世のものではないかとみられる。そして、これらをTA区と対比すると、G 9-2面が遺構面のレベルと遺物の時期からTA区第I面に、G 9-3面が遺構面のレベルが若干高くなる

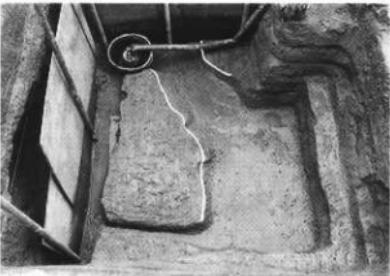
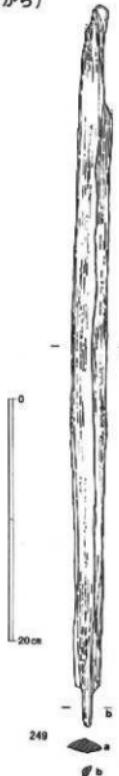


写真66 G9-5面（南から）



第98図 G9区出土  
木製品実測図

が、短い溝や遺物相からTA区第Ⅲ面に相当するものと考えられる。また、G9-5面は造構面のレベルと遺物の時期からTA区第VI面に相当するとみられる。そして、G9-4面については、時期を明確にできる遺物の出土はなかったものの、造構面のレベルと造構の状況からTA区第IV面、特に条里地割に合う溝の時期と考えられる12世紀後半段階のものに相当するのではないかと推定される。

なお、造構は確認できなかったが、第7層および第9~11層においても古墳時代の須恵器片、土師器片、そして弥生土器片などが検出された。図化できたものとしては第10層出土の須恵器杯身(248)があるが、これらの土層に伴っては造構面が存在する可能性も考えられる。

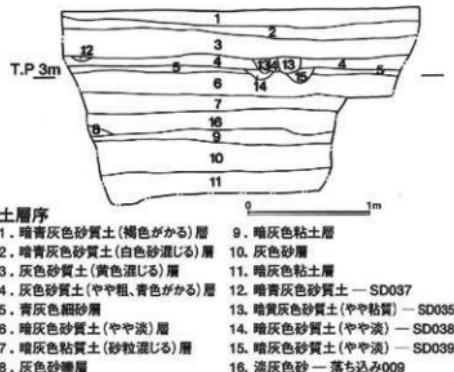
#### (9) G10区【4造構面を検出】

##### [G10-1面]

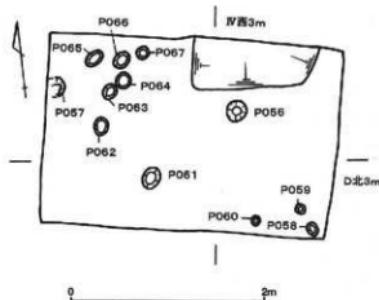
暗青灰色砂質土(白色砂混じる)層(第2層)下において灰色砂質土(黄色混じる)層(第3層)をベース面(標高T.P約3.3~3.4m)として12基のピットが検出された。明確なピットの並びは認められなかったが、P057内において根石が据えられていた。P057は検出部分で径および深さともに20cmを測り、暗青灰色砂質土と灰色砂質土が入り混じったものが埋土として認められた。

この他、P056が径約20cm、深さ約28cm、

P061が径16~22cm、深さ6cmを測ったが、これら以外のピットについては深さ2~3cmのごく浅いものであった。そして、埋土については、P056で暗青灰色砂質土が埋土となり、こ



第99図 G10区南壁土層断面図



第100図 G10-1面平面図

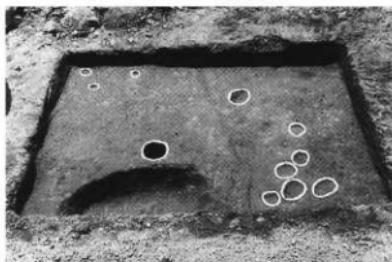


写真67 G10-1面(北から)

のP 056と前述のP 057を除いては暗青灰色砂質土が埋土として認められた。

G10-1面に関連しての遺物で図化できたものとしては、P 056出土の土師器皿(251)がある。251は、口縁部が横ナデされ、口縁端部は丸みをもつ。この他に図化できなかったが、P 056から内面に粗雑なミガキが施されている瓦器椀片が検出された。

#### [G10-2面]

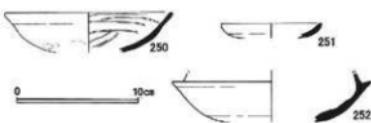
第3層下において灰色砂質土(やや粗・青色がかる)層(第4層)をベース面(標高T.P約3.15~3.2m)として溝が3条検出された。

SD035はその両側部分が深く中央部分が盛り上がる形で検出され、もとは2条の溝が重複していたのかもしれない。その幅は50~60cm、深さ6~15cmを測り、N13°Eの方位をもってのびていた。SD036は幅約18cm、深さ約3cmを測り、方位N19°Eをもってのび、SD037は幅約37cm、深さ約6cmを測り、方位N16°Eをもってのびていた。これらは、若干ずれはあるが、ほぼ平行してのびるものといえる。また、これら溝の埋土はSD035が暗黄灰色砂質土、他2条が暗青灰色砂質土であった。

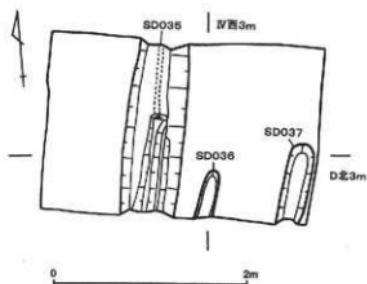
G10-2面に関連して図化できる遺物はなかったが、SD035とSD037から土師器・瓦器・須恵器の細片が少量出土した。これらの中にはしっかりした高台が付く瓦器椀片もあったが、それより時代が下るとみられる土師器皿片も含まれていた。

#### [G10-3面]

第4層下において青灰色細砂層(第5層)をベース面(標高T.P約3.1m)として溝が2条検出された。これらはN9°Eの方位をもって平行してのびていた。SD038は幅15~27cm、深さ約10cmを測り、SD039は幅15~18cm、深さ約4~6cmを測った。埋土はともに暗灰色



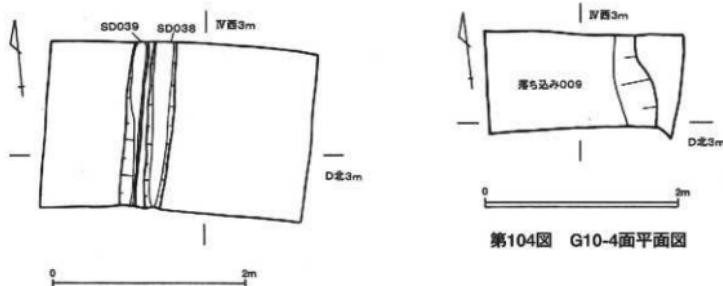
第101図 G10区出土遺物実測図



第102図 G10-2面平面図



写真68 G10-2面(北から)



第103図 G10-3面平面図



写真69 G10-3面（北から）



写真70 G10-4面（西から）

砂質土であった。これらの溝は条里地割の方位と合うものである。

G10-3面に関連して図化できた遺物はなく、また覆土層である第4層において検出された須恵器・土師器の細片についても、時期を特定できるものではなかった。ただし、現地における土層観察から第4層がTA区第IV層に相当するものと判断でき、このG10-3面についてはTA区第IV面に相当するものと考えられる。

#### [G10-4面]

暗灰色粘質土（砂粒混じる）層（第7層）下において灰色砂礫層（第8層）をベース面（標高T.P約2.7m）として落ち込み跡が1か所検出された。落ち込み009は西側に約12cmの深度で落ち込んでいた。その埋土は淡灰色砂であった。

G10-4面に関連しての遺物は、落ち込み009内から土師器の細片2点が検出されたのみで、図化および時期が特定できるものはなかった。

以上、G10区においては4面の遺構面が検出された。これらをTA区と対比しつつみると、G10-1面は出土遺物から13世紀後半に属するものと考えられ、遺構面のレベルからみるとTA区第I面に相当するものと考えられる。G10-2面についても出土遺物から13世紀代のものとみられるが、先述のように下位遺構面であるG10-3面がTA区第IV面に相当することと、遺構面のレベルから、G10-2面はTA区第III面に相当するものと考えられる。そして、G10-3面については平行してびびる溝が検出されたことから、またTA区第IV面との対比からも12世紀後半に相当するものと推測される。G10-4面については明確な時期を特定できず、TA区との対比は難しい。

なお、遺構は検出されなかったが、第8層・第10層において古墳時代の須恵器・土師器の破片が多く出土し、第11層では布留式壺の破片が認められた。252は第8層出土の須恵器杯身で、第8層については古墳時代後期に相当するものとみられる。また第10層には初期須恵器片が含まれていた。この他、人力掘削開始当初の土層（1～2層）において中世の瓦器片・土師器片が多く検出され、図化できたものとして瓦器碗（250）がある。

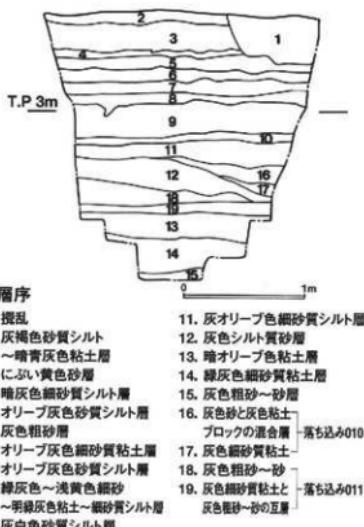
#### (10) G11区【5 遺構面を検出】

[G11-1面]

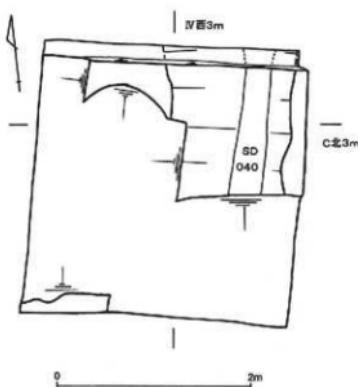
灰褐色砂質シルト～暗青灰色粘土層（第2



写真71 G11-1面 (北から)



第105図 G11区東壁土層断面図



第106図 G11-1面平面図

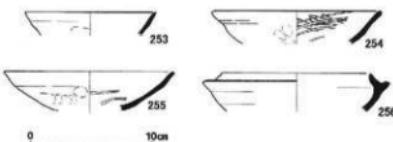
層) 下においてにぶい黄色砂層(第3層)をベース面(標高T. P約3.7m)として溝が1条検出された。溝SD040は、幅1.25~1.4m、深さ約17cmを測り、条里地割とほぼ合うN11°Eの方位をもってのびていた。埋土は第2層とほぼ同質であった。

G11-1面に関連して図化できた遺物としては、SD040出土の土師器皿(253)がある。253は口縁部がやや立ち上がり気味で外側へ広がる中世のものであるが、SD040からは他に近世以降の陶器や瓦片が検出された。

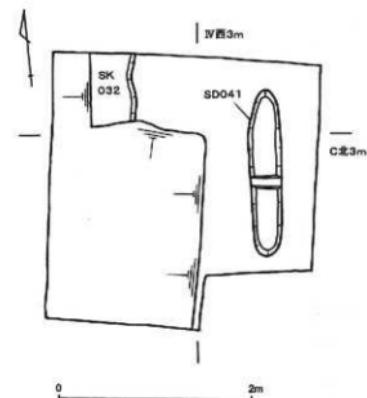
#### [G11-2面]

暗灰色細砂質シルト層(第4層)下においてオリーブ灰色砂質シルト層(第5層)をベース面(標高T. P約3.4m)として溝、土坑が検出された。溝SD041は長さ約1.7m、幅28~32cm、深さ2~3cmを測り、N5°Eの方位をもってのび、埋土は灰色砂質シルトであった。条里地割の方位より若干西へ傾くが、これは限られた範囲の中でのずれであると考えられる。また、土坑SK032は部分的に検出されたもので、深さ2~3cmを測り、埋土は灰オリーブ色砂質シルトであった。

G11-2面に関連して遺構内からの遺物の出土はなかったが、覆土層である第4層において土師器・瓦器の破片が検出され、図化できたものとして瓦器挽(254)がある。254は内面にやや粗いミガキが施されるが、外面にミガキは認められない。また図化できなかったが、小型の瓦器羽釜片などがあり、第4層は13世紀前半から中頃にかけての遺物を中心と包含し、おそらくG11-2面もほぼ同時期のものではないかと推測される。



第107図 G11区出土遺物実測図



第108図 G11-2面平面図

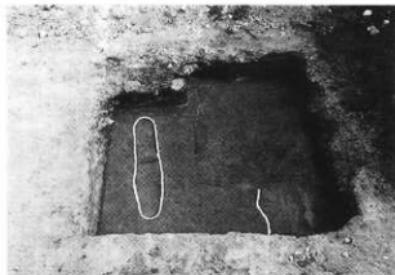


写真72 G11-2面(北から)

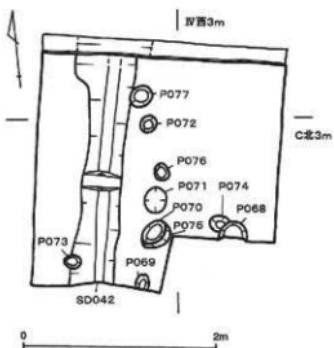
[G11-3面]

オリーブ灰色砂質シルト層（第8層）下において緑灰色～浅黄色細砂等からなる土層（第9層）をベース面（標高T. P約3.05～3.1m）として溝、ピットが検出された。溝は1条検出され、SD042は幅35～60cm、深さ12～20cmを測り、条里地割とほぼ合うN12°Eの方位をもってのびていた。その埋土は暗オリーブ灰色粘土とオリーブ灰色砂質シルトが互層をなすものであった。

ピットは10基検出されたが、明確に建物跡等に復元できるピットの並びは確認されなかった。P068～P073については、擾乱坑の下より検出され、第2層に似た暗灰色砂質シルトを埋土としていたことから、G11-1面からの掘り込みであるとみられ、これらについては近世以降のものと考えられる。この他のピットでは、P070に重複される形で検出されたP075において柱痕が確認され、深さ約30cmを測った。P075では瓦器釜の破片が柱底で据えられたような形で認められ、礎板のような意味をもって転用された可能性が考えられる。他ではP076が深さ約9cm、P074・P077が深さ約5cmを測った。これらのピットの埋土については、

P077が暗緑灰色と明青灰色の砂質シルトの混合層であったが、他はオリーブ灰色の砂質シルトを主体とするものであった。

G11-3面に関連して図化できた遺物はなかったが、P075において瓦器三足釜の破片や、SD042にて土師器・須恵器の細片が検出された。G11-3面の時期については、P068～P073を除いて、P075の出土遺物からおおむね13世紀頃に相当するのではないかと考えられるが、TA区や他のグリットでの検出遺構との関係からみると、G11-3面検出の溝についてはTA区第IV面検出の溝と符合する。このことから、G11-3面はTA区第IV面に相当し、溝については12世紀後半に属するものではないかと考えられる。



第109図 G11-3面平面図



写真73 G11-3面（北から）

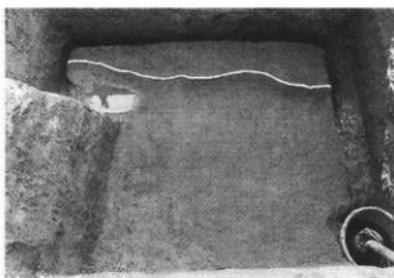


写真74 G11-4面 (東から)

[G11-4面]

灰オリーブ色細砂質シルト層（第11層）下において灰色シルト質砂層（第12層）をベース面（標高T. P約2.6m）として落ち込み跡が1か所検出された。落ち込み010は、調査区の東側が2~6cmの深さで落ち込むものであった。その落ち込み肩はおおむねN15°Eの方位をもってのび、埋土は灰色の砂および粘土を主体とするものであった。

G11-4面に関連して図化できた遺物はなかったが、落ち込み010内より古墳時代の土師器片が2点検出され、その覆土層である第11層においては古墳時代の須恵器片・土師器片が検出された。須恵器片の調整からみて古墳時代後期のものとみられ、G11-4面についてもおおむね当該期に相当するものと推測される。

[G11-5面]

第12層下において暗オリーブ色粘土層（第13層）をベース面（標高T. P約2.4m）として落ち込み跡が1か所検出された。落ち込み011は、調査区の東側で約15cmの深さで落ち込み、その落

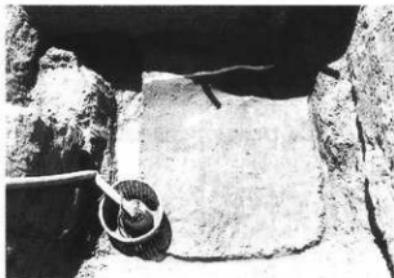


写真75 G11-5面 (東から)



第110図 G11-4面平面図



第111図 G11-5面平面図

ち込み肩の方位はおむねN 3° Wを示していた。その埋土は灰色の粘土と砂を主体とするものであった。

G11-5面に関連して図化できた遺物はなかったが、落ち込み011において古墳時代の土師器片と須恵器片が少量出土した。

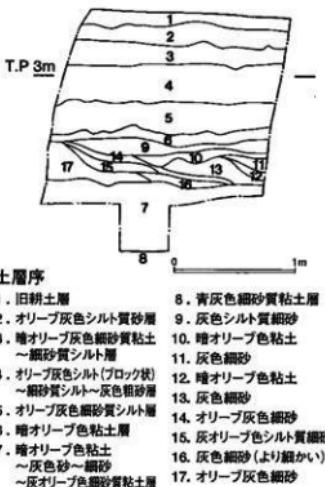
以上、G11区においては、5面の遺構面が検出された。G11-1面は近世以降、G11-2面は13世纪代、G11-3面については12世纪後半から13世纪代、G11-4面とG11-5面は古墳時代のものとみられ、G11-4面についてはその後期に相当するとみられる。そして、これらをTA区と対比すると、G11-2面が、遺構面のレベルと出土遺物からTA区第1面に相当するものとみられる。G11-3面については、前述のようにTA区第IV面に相当すると考えられる。また、断定はできないが、G11-4面についてはレベルと時期からみてTA区第VI面に相当する可能性がある。

なお、遺構を伴わなかつたが、各土層においては遺物が包含されており、特に第7層と第10層において多くの遺物が検出された。第7層では、255の瓦器碗をはじめとする中世の瓦器片・土師器片を中心とする遺物が認められ、第10層では、256の須恵器杯身をはじめとする古墳時代の須恵器片・土師器片が包含されていた。

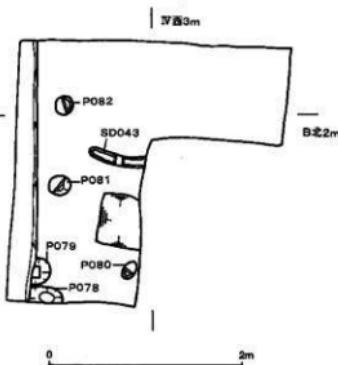
#### (11) G12区【3遺構面を検出】

##### [G12-1面]

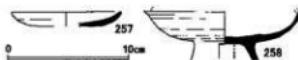
旧耕土層（第1層）下においてオリーブ灰色シルト質砂層（第2層）をベース面（標高T.P約3.4m）として溝、ピットが検出された。溝は1条検出され、SD043は幅約10cm、深さ約2cm、おむねN72°Wの方位をもってのびていた。その



第112図 G12区東壁土層断面図

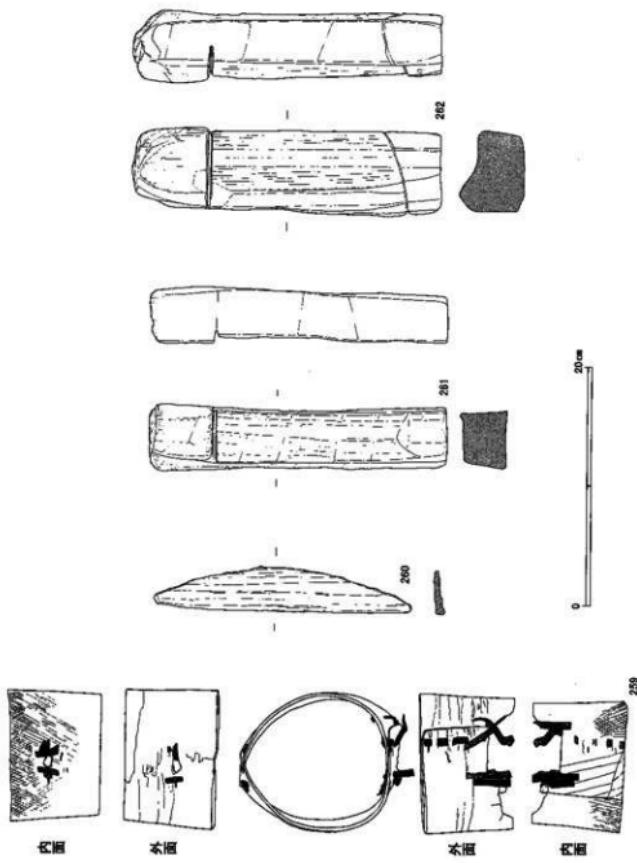


第113図 G12-1面平面図



第114図 G12区出土遺物実測図

第116図 G12区出土木製品実測図



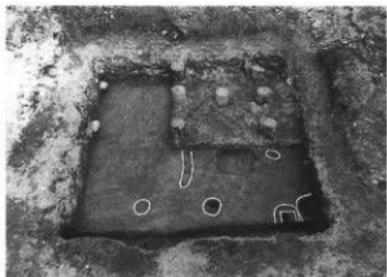


写真76 G12-1面（西から）



写真77 G12-1面P079内柄杓 (259)

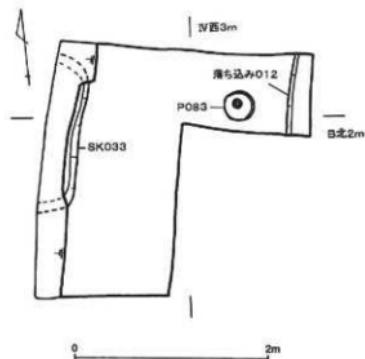
埋土は暗オリーブ灰色の砂質シルトであった。

ピットは5基検出された。各ピットの径と深さは、P 0 7 8 で径35cm以上、深さ約 5 cm、P 0 7 9 で径約28cm、深さ約 8 cm、P 0 8 0 で径12~18cm、深さ約 2 cm、P 0 8 1 で径約 20cm、深さ約 24cm、P 0 8 2 で径約20cm、深さ約 2 cmを測った。これらの埋土は、P 0 7 8・P 0 7 9・P 0 8 1が暗青灰色のシルトもしくは粘土を主体とするものであり、他は暗オリーブ灰色の砂質シルトであった。

G 12-1 面に関連しての遺物では、土器類で図化できるものはなかったが、ピット内において中世の土師器・瓦器の細片とともに近世以降の所産とみられる陶磁器片が出土した。また、P 0 7 9 内において柄杓の曲物(259)が据えられた状態で検出されたが、これは出土状況からして近世以降の所産とみられる。

#### [G 12-2 面]

暗オリーブ灰色細砂質粘土～細砂質シルト層（第3層）下においてオリーブ灰色シルト（ブロック状）等からなる土層（第4層）をベース面（標高T. P約3.1m）としてピット、土坑、落ち込み跡が検出された。ピットP 0



第116図 G12-2面平面図

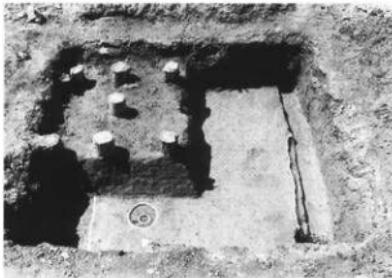


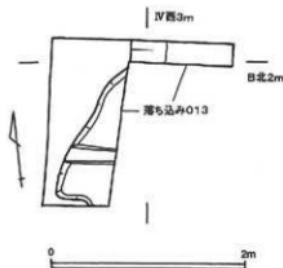
写真78 G12-2面（北から）

S 3 では柱痕が認められた。掘り方径約30cm、柱痕径約9cm、深さ約35cmを測った。掘り方の埋土はオリーブ灰色シルト、柱痕の埋土は褐灰色シルトを主体とするものであった。

土坑SK 0 3 3は、部分的に検出されたものであり、検出部分で深さ9cmを測り、その埋土はオリーブ灰色粘土であった。

落ち込みO 1 2は、調査区の東端で6cm程度の深さで落ち込むのを確認したものであるが、部分的な検出であり、溝か土坑の一部分である可能性もある。その埋土はオリーブ灰色粘土であった。検出部分での落ち込み肩の方はN 12° Eを示し、条里地割とほぼ合うものであった。

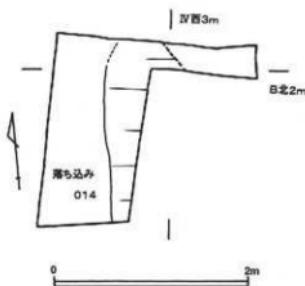
G 12-2面では遺構内からの遺物の出土はなかったが、覆土層である第3層から13世紀代のものとみられる土師器片・瓦器片が出土した。土器類で図化できるものはなかったが、加工痕のある木材(261)が図化できた。261はその一端に切れ込みを入れて加工されているが、これと同様に材の一端に切れ込みを入れた加工材(262)が第6層からも検出されている。このことから、261については、第6層付近からの混入である可能性が考えられる。



第117図 G12-3面上位平面図



写真79 G12-3面上位（北から）



第118図 G12-3面下位平面図



写真80 G12-3面下位（北から）

### [G12-3面]

暗オリーブ色粘土層（第6層）下（標高T.P約2.45～2.5m）において自然流路とみられる堆積層（第9～17層）が約40cmの厚さで認められた。当初、堆積土層を細かく分けてみたことから、まず第6層下において深さ8cm程度の落ち込み跡（落ち込み013）として検出し、その後、下位においても別の落ち込み跡（落ち込み014）として検出して記録した。しかし、後の調査区壁面の土層観察からこれらは1つの自然流路であると判断された。

G12-3面に連関しての遺物は、自然流路とみられる堆積層から古墳時代の土師器片・須恵器片が検出された。図化できたものとしては須恵器高杯（258）がある。258は有蓋高杯であり、推定で3方か4方の方形の透窓をもっていたようである。杯部は底部外面を回転ヘラケズリ、他を回転ナデにより調整されている。この他に図化はできなかったが、おおむね古墳時代後期のものが下限時期の遺物として認められた。

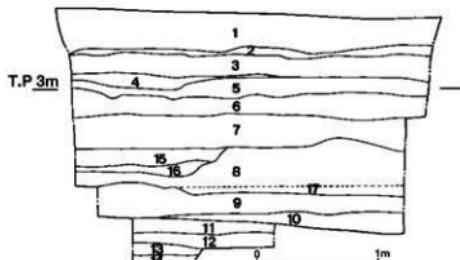
以上、G12区においては3面の遺構面が確認できた。G12-1面は近世以降、G12-3面は古墳時代後期のものとみられ、G12-2面については覆土層で13世紀代の遺物が出土していることから、G12-2面もおおむね当該期に相当するとみられる。これらをTA区と対比すると、G12-2面が、遺構面のレベルからTA区第I面～第IV面のいずれかに対応する可能性があるが、他のグリットでの検出遺構の様相からみてTA区第IV面に相当するものと考えられる。G12-3面は遺物相と遺構面のレベルからTA区第VI面に相当するのではなかないと考えられる。

なお、遺構を伴わなかったが、他の土層においても遺物の包含が認められ、第2層で土師器皿（257）をはじめとする中世の土師器片・瓦器片が多く検出され、また円盤状のものに加工されたものが割れたとみられる木製品（260）が検出された。この他、第5層においては古墳時代を中心とする土師器片・須恵器片が多く含まれていた。

### (12) G13区【5遺構面を検出】

#### [G13-1面]

現代盛土層（第1層）下において灰色シルト質細砂層（第2層）をベ



#### 土層序

- |                 |                     |
|-----------------|---------------------|
| 1. 現代盛土層        | 10. 灰オリーブ色砂質粘土層     |
| 2. 灰色シルト質細砂層    | 11. 暗オリーブ色粘土層       |
| 3. オリーブ灰色細砂質粘土層 | 12. 灰色シルト質粗砂層       |
| 4. オリーブ灰色砂質シルト層 | 13. 青灰色細砂質粘土層       |
| 5. 灰色砂質シルト層     | 14. 青灰色粘土層          |
| 6. 錆灰色細砂質粘土層    | 15. 灰色砂質シルト—落ち込み016 |
| 7. オリーブ灰色粘土層    | 16. 灰色粘質シルト—落ち込み017 |
| 8. 灰色粗砂層        | 17. 灰色粗砂—落ち込み017    |
| 9. 灰オリーブ色粘土層    |                     |

第119図 G13区南壁土層断面図

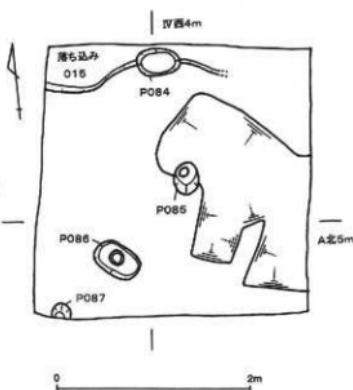
ース面（標高T. P約3.3m）としてピットと落ち込み跡が検出された。ピットは4基検出され、P085・P086では柱痕が確認された。P085は擾乱を受けており、残存部分で掘り方径25~30cm、柱痕径約10cm、深さ約15cmを測り、埋土は灰色細砂質シルトであった。P086は掘り方長径約50cm、短径約30cm、柱痕径約10cm、深さ約7cm、埋土は灰色粗砂であった。この他、P084は長径約45cm、短径約28cm、深さ約3cmを測り、埋土は暗青灰色砂質シルトであった。またP087についてはわずかな痕跡を確認するのみであった。

落ち込み跡は1か所確認された。落ち込み015は、調査区の北側で約10cmの深さで落ち込んでいた。その落ち込み肩はカーブして東西方向にのびるが、その東側は擾乱を受けていた。埋土は灰色細砂質シルトであった。

G13-1面に関連しての遺物ではP086内より瓦器片1点と近現代の瓦片1点が出土し、G13-1面は現代盛土層下において検出されていることから、この遺構面については近現代のものと考えられる。

#### [G13-2面]

灰色砂質シルト層（第5層）下において緑灰色細砂質粘土層（第6層）をベース面（標高T. P約2.95~3.0m）として3条の溝が検出された。SD044は幅30cm前後、深さ約3cm、SD045は長さ約1.05m、幅約20cm、深さ約2cmを測った。これらは元々一続きのものであったとみられ、その方位はおおむねN83°Wを示していた。また、SD046は幅18~30cm、深さ3~4cmを測った。その方位は前記2条の溝とほぼ同じであり、この方



第120図 G13-1面平面図

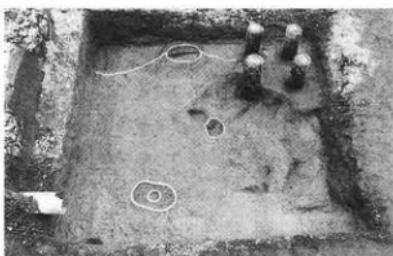
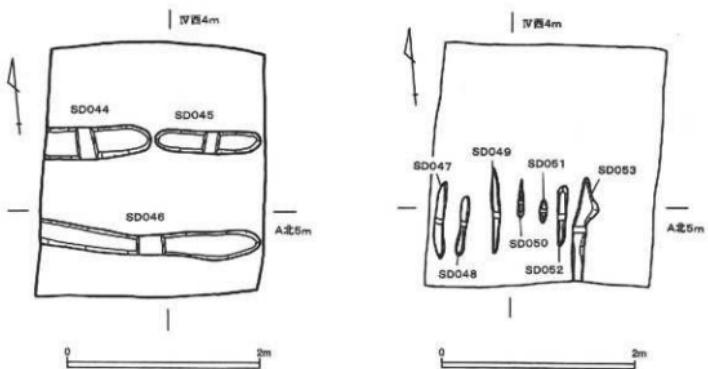


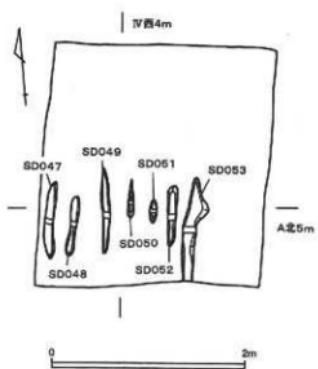
写真81 G13-1面（南から）



写真82 G13-2面（東から）



第121図 G13-2面平面図



第122図 G13-3面平面図

位はおおむね条里地割に沿ったものといえる。これら溝の埋土については灰色粗砂であった。

G13-2面に関連した遺物では、SD044とSD046で土師器の細片が各1点出土したのみである。固化できる遺物はなく、時期を特定できるものは認められなかった。

#### [G13-3面]

第6層下においてオーリーブ灰色粘土層（第7層）をベース面（標高T.P約2.8m）として溝が7条検出された。溝はいずれも小溝であり、大きなもので幅10~20cm（SD053）を測ったが、他は幅10cm以下であった。深さは1~3cmを測り、埋土は緑灰色シルト質細砂であった。これらの溝はN7~11°Eの方位をもってのび、おおむね条里地割に合うものであった。

G13-3面に関連しての遺物では、遺構内からの遺物の出土はなかったが、覆土層である第6層において古墳時代のものとみられる須恵器片・土師器片の包含が認められた。

#### [G13-4面]

第7層下において灰色粗砂層（第8層）をベース面（標高T.P約2.5m）として落ち込み跡が1か所検出された。落ち込み016は、調査区の東側で15cm前後の深さで落ち込み、その落ち込み肩は蛇行して南北方向にのびていた。その埋土は灰色のシルトを主体とするものであつ



写真83 G13-3面（南から）



写真84 G13-4面（南から）

た。

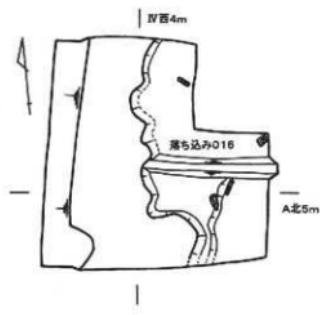
G13-4面に関連しての遺物では、落ち込み016内から土師器と製塙土器（内面に布目痕）の細片を各1点、覆土層である第7層において古墳時代のものとみられる土師器片・須恵器片が少量認められたのみであり、図化できるものはなかった。

#### [G13-5面]

第8層下において灰オリーブ色粘土層（第9層）をベース面（標高T.P約22m）として落ち込み跡が1か所検出された。落ち込み017は調査区の西側で10cm程度の深さで落ち込み、その落ち込み肩はおむねN8°Eの方位で南北方向にのびていた。埋土は第8層と同じ灰色粗砂であり、第8層との分層は難しかった。

G13-5面に関連しての遺物については、落ち込み017内から古墳時代の土師器片・須恵器片が検出された。264は土師器高杯の杯部である。楕円形の杯部で、口縁部は横ナデされ、内面には放射状のミガキが認められる。また、上位からの混入ではあるが、瓦器椀（263）を1点図化することができた。

以上、G13区においては5面の遺構面が検出された。G13-1面は近現代、G13-5面は古墳時代後期に相当するとみられるが、他の



第123図 G13-4面平面図



第124図 G13-5面平面図



写真85 G13-5面（南から）

遺構面については時期の判断が難しい。G 13-2面については時期を特定できる遺物がなかった。ただし、その遺構面レベルと条里地割と合う溝が検出されたことから、TA区第



第125図 G13区出土遺物実測図

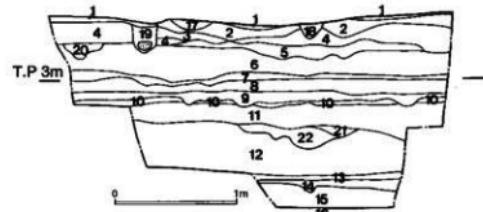
III面か第IV面に相当するものでないかと推測され、他のグリットにおける遺構とも対比すると、TA区第IV面に相当する可能性が高いと考えられる。G 13-3面は、遺構内からの遺物の出土はなかったが、その覆土層から古墳時代の遺物が検出された。しかし、TA区と対比すると、遺構面レベルではTA区第V面に対応し、遺構の内容も条里地割の影響を受けた溝という可能性が高く、その時期は古墳時代まで遡らないのではないかと考えられ、G 13-3面の時期については判断しかねる。G 13-4面については、遺構面のレベルからと、下位面のG 13-5面が古墳時代後期のものと判断されることから、これもおおむね古墳時代後期の中に入るものと考えられる。そして、TA区との対比からみると、遺構面のレベルではTA区第VI面と合うことになる。

なお、遺構を伴わなかったが、第2層においては中世を中心とする土師器片・瓦器片を多く包含し、G 13-5面より下位の第10~11層でも古墳時代の土師器片・須恵器片が含まれていた。265は第11層出土の韓式系土器の破片で外面に格子目タタキ痕がみられる。

### (13) G16区【5 遺構面を検出】

#### [G16-1面]

旧耕土層（第1層）下において浅黄色砂層（第2層）・暗青灰色砂質シルト層（第3層）・灰色砂質シルト層（第4層）をベース面（標高T.P約3.4~3.45m）としてピット、土坑が検出された。ピットは20基検出されたが、柱痕を有するものは認められなかった。ピットで径が10~20cm程度のものについて平面形がほぼ円形を呈し、それより大きくなるピットはやや形の崩れた楕円形を呈していた。ピットの深さは2~10cm程度のものであった。ただし、調



|                   |   |
|-------------------|---|
| 1. 旧耕土層           | 13. 暗オリーブ灰色シルト質粘土層                      |
| 2. 浅黄色砂層          | 14. 灰色砂層                                |
| 3. 暗青灰色砂質シルト層     | 15. 暗オリーブ灰色シルト質粘土層                      |
| 4. 灰色砂質シルト層       | 16. 明緑灰色細砂層                             |
| 5. 暗オリーブ色粗砂質シルト層  | 17. 暗青灰色砂質シルト（やや粗）—SK034                |
| 6. 灰色砂質シルト層       | 18. 暗青灰色砂質シルト—P0103                     |
| 7. オリーブ灰色小礫～砂層    | 19. 暗青灰色砂質シルト・ピット埋土・根石有                 |
| 8. オリーブ灰色砂質シルト層   | 20. 暗オリーブ灰色砂質シルト<br>～オリーブ灰色細砂質シルト—P0108 |
| 9. 灰色～灰白色砂～粗砂層    | 21. オリーブ灰色砂質シルト—SK037                   |
| 10. 明緑灰色細砂層       | 22. オリーブ灰色細砂質シルト                        |
| 11. 暗オリーブ灰色細砂質粘土層 |   |
| 12. 灰色粗砂～砾層       |   |

第126図 G16区北壁土層断面図

査区北壁断面で確認されたピット（第19層）においては根石が据えられた状態で確認され、深さ約20cmを測った。これらピットの埋土は、おむね第1層である旧耕土とほぼ同質の暗青灰色土を主体とするものであったが、P098・P0101・P0102・P0105についてはオリーブ灰色系のシルトもしくは細砂であった。

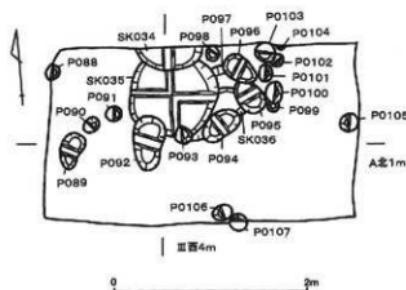
土坑は3基検出された。SK

035は最大径約90cm、深さ約9cmを測り、SK034・SK036については部分的な検出で全形は明らかでないが、深さはSK034で約10cm、SK036で約6cmを測った。これらの土坑の埋土は暗青灰色土を主体とするものであった。

G16-1面に関連する遺物で図化できるものはなかったが、各遺構からは中世のものとみられる土師器・瓦器の細片が検出された。ただし、その覆土層となる第1層は近年の耕土層であることと、他のグリットにおける同レベルの遺構面の状況からみると、G16-1面については、遺構内より中世遺物の出土はあるものの、その時期は中世より下るのではないかと考えられる。

#### [G16-2面]

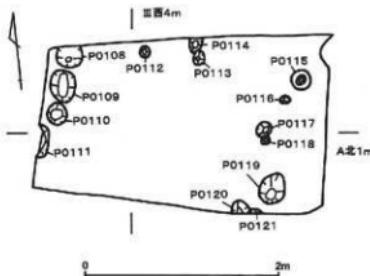
第4層及び灰オリーブ色粗砂質シルト層（第5層）下において灰色砂質シルト層（第6層）をベース面（標高T.P約3.2~3.3m）として14基のピットが検出された。建物跡等に復元できるピットの並びは認められなかったが、P0115



第127図 G16-1面平面図



写真86 G16-1面（北から）



第128図 G16-2面平面図

で柱痕が確認できた。P 0115は掘り方径約20cm、柱痕径約10cm、深さ約15cmを測った。他のピットについては、径が8cm程度のもの、15cm程度のもの、25~30cm程度のものに大きく分けられ、その深さについては多くが3~7cm程度のものであったが、P 0108が約25cm、P 0111が約15cm、P 0119が約30cmとやや深かった。これらのピットの埋土は、オリーブ灰色系の砂もしくはシルトを主体とするものであったが、P 0113で暗青

灰色シルトが埋土となり、P 0111・P 0117で青灰色シルトがオリーブ灰色系の土に混じり、P 0114ではオリーブ黄色砂礫が埋土であった。

G 16-2面に関連しての遺物について  
は、P 0117から時期不明の土師器細  
片が1点出土したのみであり、覆土層か  
らの遺物の出土もなかった。

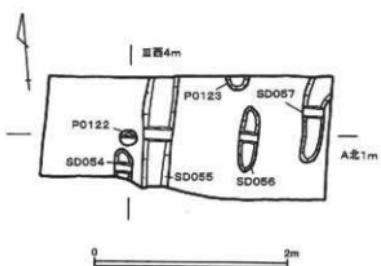
#### [G 16-3面]

オリーブ灰色砂質シルト層（第8層）  
下において灰色~灰白色砂~粗砂層（第  
9層）をベース面（標高T. P約2.9m）  
として溝、ピットが検出された。溝は4  
条検出され、おおむね条里地割と合うN  
10~12° Eの方位をもって平行してのび  
ていた。SD 054は幅約18cm、深さ約4cm、  
SD 055は幅25~32cm、深さ約6cm、SD  
056は長さ約68cm、幅約16cm、深さ約3cm、  
SD 057は幅20~25cm、深さ4cmを測った。  
これらの溝の埋土はオリーブ灰色の砂質シ  
ルトであった。

ピットは2基検出された。P 0122は径  
約15cm、深さ約4cmを測り、埋土はオリーブ  
灰色砂質シルトであった。P 0123は検出  
部分で径約22cm、深さ約7cm、埋土は褐灰色  
粘質シルトであり、埋土中に木片が含まれて



写真87 G16-2面 (北から)



第129図 G16-3面平面図



写真88 G16-3面 (北から)

いたが、これが柱痕に関連するものかどうかの確認にまでは至らなかった。

G16-3面に関連しての遺物については、遺構内および覆土層で土師器・須恵器の細片が少量出土したのみであった。下限時期を明確に特定できる遺物の出土はなかったが、中世の土師器皿片が含まれていた。

#### [G16-4面]

第9層下において明緑灰色細砂層(第10層)をベース面(標高T. P約2.8~2.85m)として溝、ピットが検出された。溝は1条検出された。SD058は幅15~20cm、深さ約2cmを測り、方位はN13°Eを示していた。その埋土はオリーブ灰色シルト質粗砂であった。

ピットは1基検出された。P0124は径15~20cm、深さ約2cmを測り、埋土はオリーブ灰色シルト質粗砂であった。

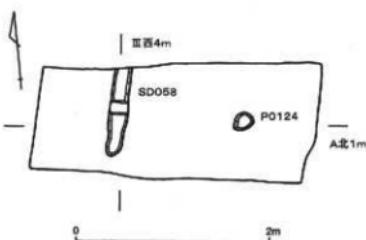
G16-4面に関連しての遺物は、覆土層から古代以前のものとみられる土師器片・須恵器片が少量出土したのみで、図化できるものはなかった。

#### [G16-5面]

暗オリーブ灰色細砂質粘土層(第11層)下において灰色粗砂・砾層(第12層)をベース面(標高T. P約2.5~2.6m)としてピット、土坑が各1基検出された。ピットP0125は径30~38cm、深さ約8cmを測り、埋土は茶褐色粘質土であった。柱痕は認められなかった。

土坑SK037は部分的な検出であったが、検出部分で深さ約20cmを測った。埋土は茶褐色粘質土であった。

G16-5面に関連しての遺物で図化できたものはなく、出土した遺物も少なかったが、



第130図 G16-4面平面図

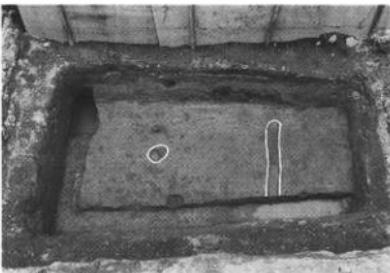
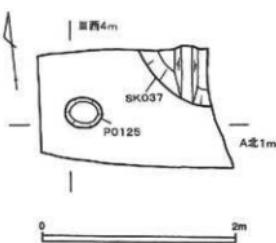


写真89 G16-4面(北から)



第131図 G16-5面平面図



第132図 G16区出土遺物実測図

S K 0 3 7において古墳時代の土師器片・須恵器片が少量検出された。

以上、G 16区においては5面の遺構面が検出された。ここで出土遺物は細片が多く、各遺構面の時期特定に直接結びつくものは少なかったが、G 16-1面については、先述のように中世より時代が下るものと考えられる。G 16-2面はこれに伴う遺物がほとんどなかつたが、その上位面にあたるG 16-1面のベース層の1つである第3層において、266の土師器皿をはじめとする13世紀代のものとみられる土師器・瓦器の破片が多く含まれていた。また、G 16-2面のベース層である第6層においても13世紀代を下限時期とする瓦器片・土師器片が含まれていた。このことから、おそらくG 16-2面は13世紀代に相当するものと推測される。G 16-3面は、その覆土層に中世のものとみられる土師器片があることと、条里地割に合う溝がみられることから、中世もしくは平安時代に属するものとみられる。G 16-4面については覆土層から古代以前のものとみられる遺物片が認められたが、その時期の特定は難しい。G 16-5面については、古墳時代の遺物が遺構内より少量検出されたが、そのベース面となる第12層では、267の須恵器杯身をはじめとする古墳時代後期を中心とする須恵器片・土師器片を多く含み、このことを考慮すると、G 16-5面は古墳時代後期に相当するものと考えられる。そして、これらをTA区と対比すると、遺構の内容と遺構面のレベルからG 16-3面がTA区第IV面に相当し、また、G 16-5面が、遺構面のレベルと遺構埋土の状況からTA区第VI面に相当するのではないかと考えられる。

## V. まとめ

以上、TA区とG区での遺構・遺物の検出状況についてまとめ、TA区検出の遺構面を基準にG区検出遺構との対比を試みた。先述のように、調査地内の土層の堆積は複雑であり、TA区とG区で検出した遺構面を層位的に対比するのは難しく、出土遺物と遺構の内容、そして遺構面レベルからの対比となり、その確実性は若干低いといわざるを得ないが、部分的にでも可能性を含めて対比できたのが、TA区第I面、第III面、第IV面、第VI面、第VII面である。

TA区第I面と対比できたのは、G 2区・G 6区・G 7区・G 9区～G 11区の遺構面である(第133図)。TA第I面では条里地割とほぼ合う溝が検出されたが、G区においてもG 10区を除いて、方位が条里地割とほぼ合う南北方向の溝あるいは畦畔が検出され、TA区検出遺構と整合性があるといえる。



写真90 G 16-5面(東から)

T A区第Ⅲ面と対比できたのは、G 9区・G 10区である（第134図）。T A区第Ⅲ面では条里地割とほぼ合う溝が検出され、G区においても南北（東西）方向にのびる溝が検出された。G 9区検出の溝については方位が条里方位と若干ずれるが、T A区第Ⅲ面でも同様の小規模な溝がいくつかみられ、T A区検出遺構と整合性があるといえる。

T A区第Ⅳ面と対比できたのは、G 5区・G 6区～G 13区・G 16区である（第135図）。T A区第Ⅳ面においても条里地割とほぼ合う溝が認められ、G区においても条里地割に合う溝や、G 9区ではそれに則した形で並ぶピットが検出された。そして、これらの遺構面では、T A区及びG区間で繋がるとみられる溝があり、その整合性は高いものといえる。そして、T A区第Ⅳ面の条里地割と合う溝の時期は12世紀後半と考えられることから、G区の遺構面も12世紀後半にその時期が想定される。

T A区第VI面と対比できたのは、G 2区・G 5区・G 7区～G 9区・G 11～G 13区・G 16区である（第136図）。ここでは、古墳時代後期の落ち込み跡や流路跡が主として検出されたが、前述のT A区第I面・第III面・第IV面のように、条里地割に合う溝というような各調査区間の関連性を示す遺構は認められなかった。このことから、各調査区間の関連性の検証は難しいが、遺物相と遺構面レベルからみて、T A区第VI面と対比される可能性があるものとして上げておく。

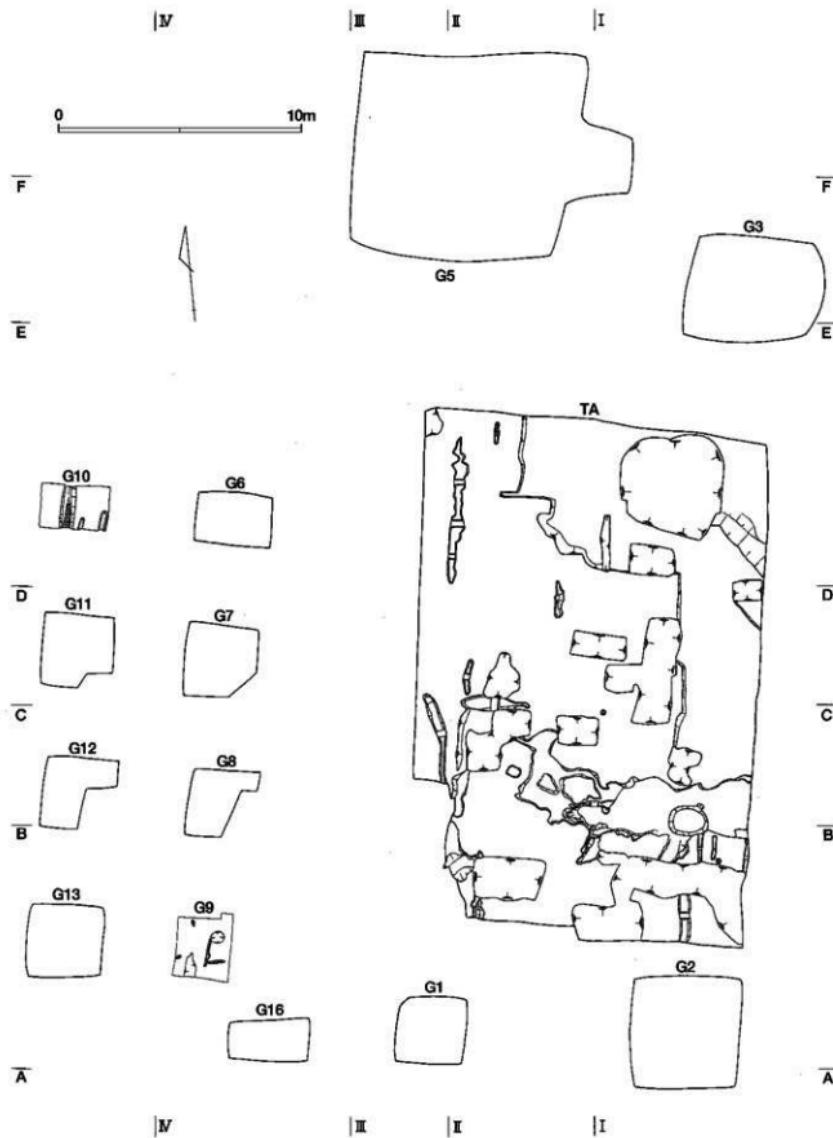
T A区第VII面と対比できたのは、G 1区・G 3区である（第137図）。ここではピットや土坑が検出されたが、これもT A区第VI面と同様、各調査区間の関連を示す遺構が認められず、遺物相とレベルからの判断となり、この対比も可能性があるものとして上げておく。

このように、確実性は決して高いといえないが、いくつかのG区検出遺構が5面のT A区検出の遺構面と対比することができた。このうち、T A区第VI面・第VII面に対比される遺構は調査区間での繋がりを示す関連性が乏しいが、T A区第I面・第III面・第IV面に対比されるG区検出遺構については、多くのG区で条里地割と合う溝が検出され、各調査区間で溝の繋がりが認められた。先述したように、当調査地が位置する一帯での条里地割は、N 7° 30' ~ 9° 30' Eの方位をもっている。ここで検出された溝には少し方位のずれをもつものもあるが、これは限られた範囲内での部分的なずれであり、全体的にみると条里地割に則した中で形成された溝であると考えられる。また、T A区第IV面及びそれに対比されるG 9区遺構面では、条里方位と合うピットの並びが認められた。このことから、調査地内においては条里地割に則した形で建物跡などの構築物が存在した可能性も考えられる。

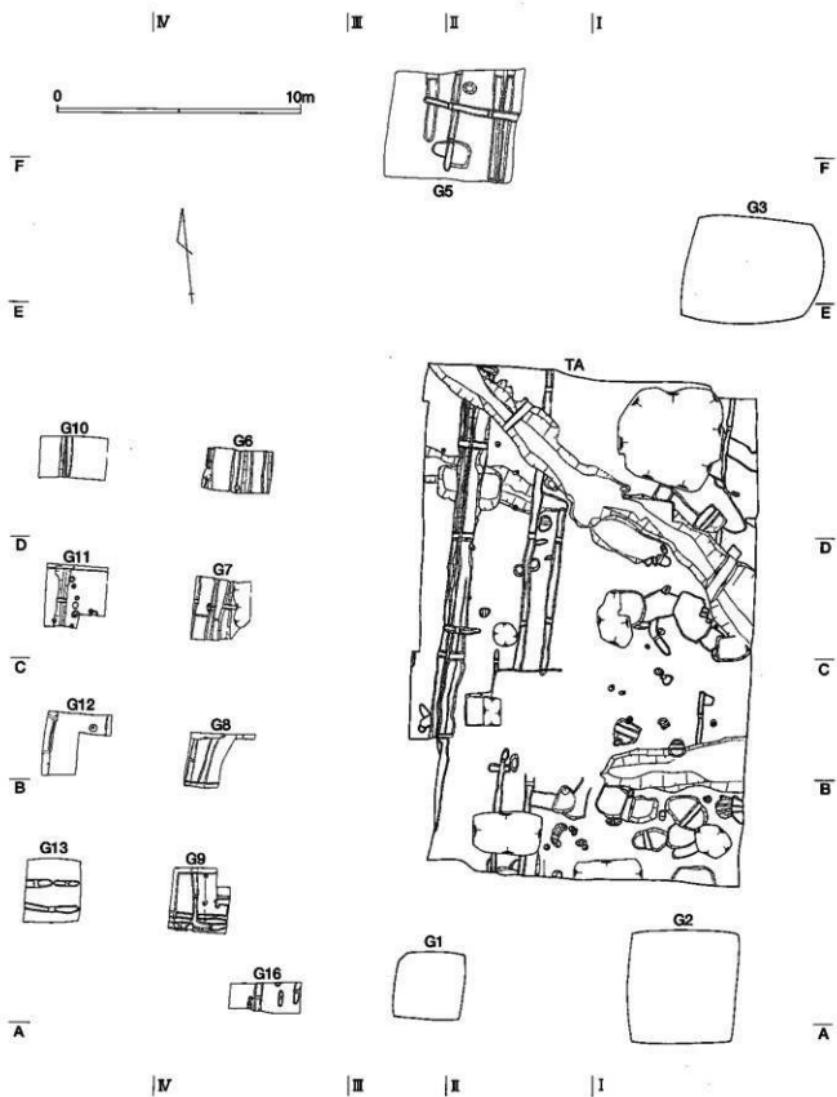
さて、調査地内での遺構の時期と特徴は、T A区の調査のまとめで述べたところであるが、G区での遺構の検出状況をみると、T A区で確認された遺構面とは明らかに対比できないものがある。このことから、調査地内においては、T A区で確認された9面の遺構面以外にも時期の異なる遺構面が複数存在するものと考えられる。



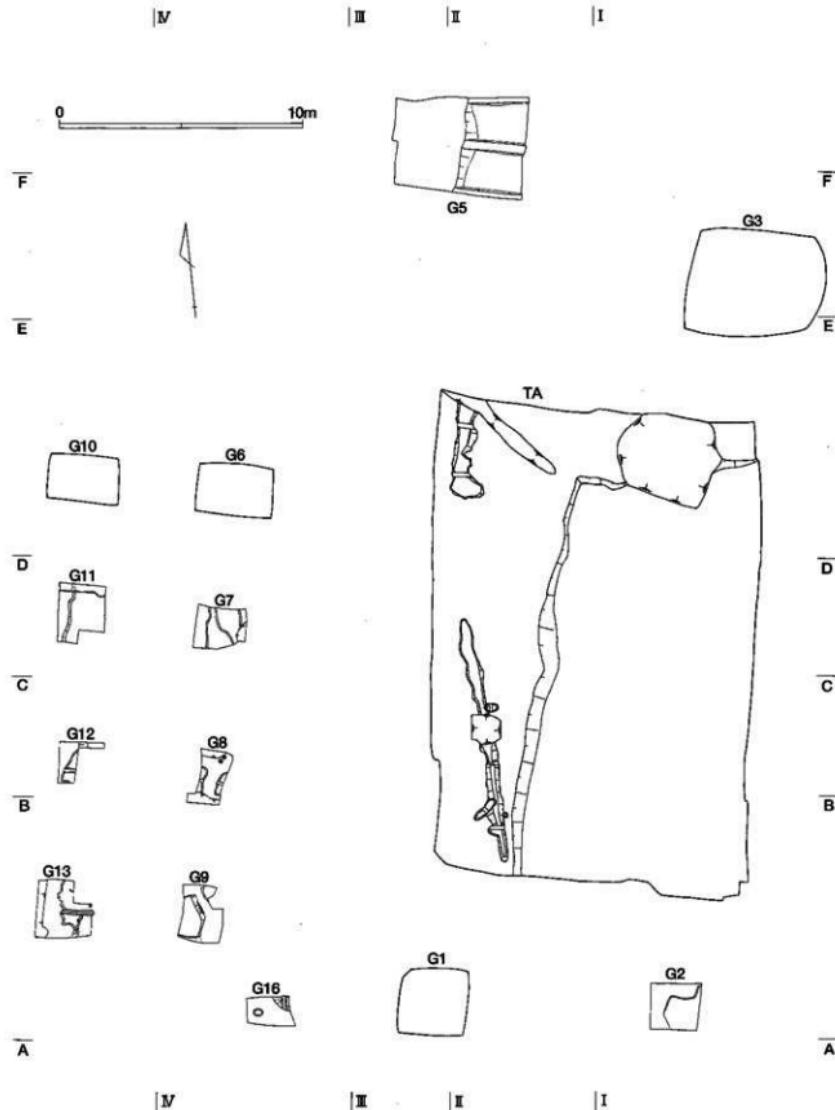
第133図 TA区第I面・G区造構面对比図



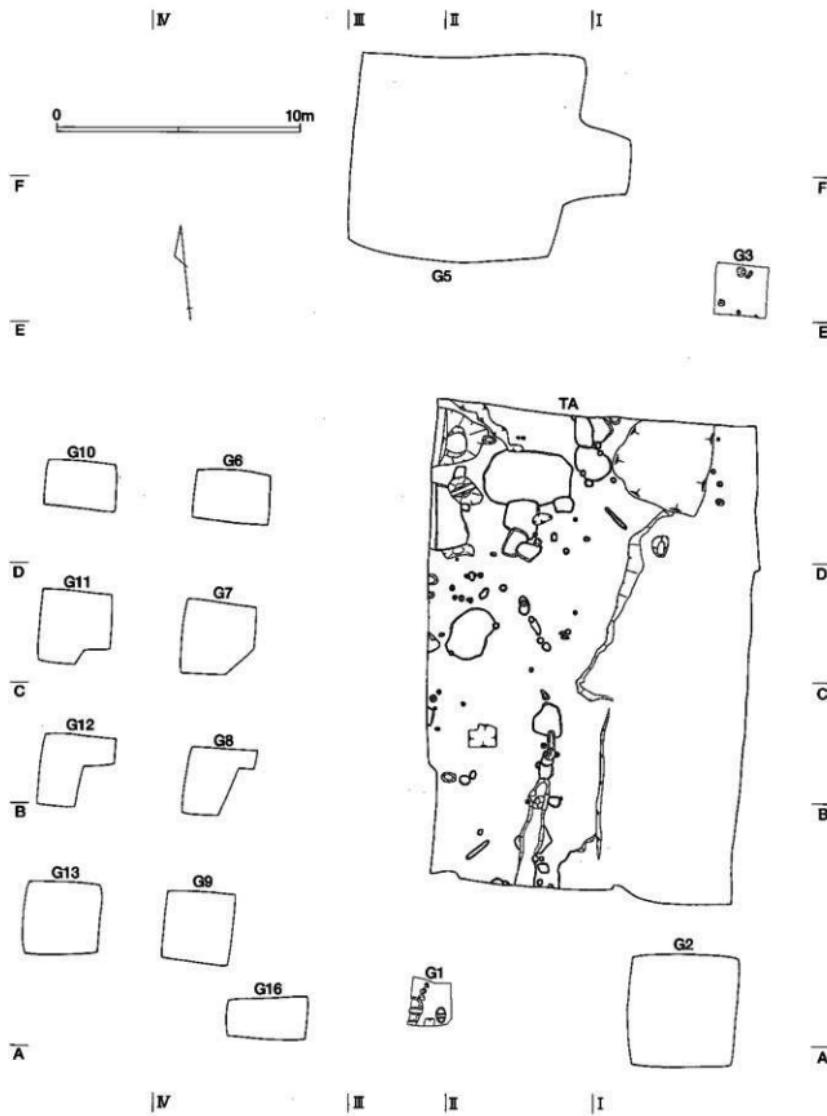
第134図 TA区第III面・G区遺構面对比図



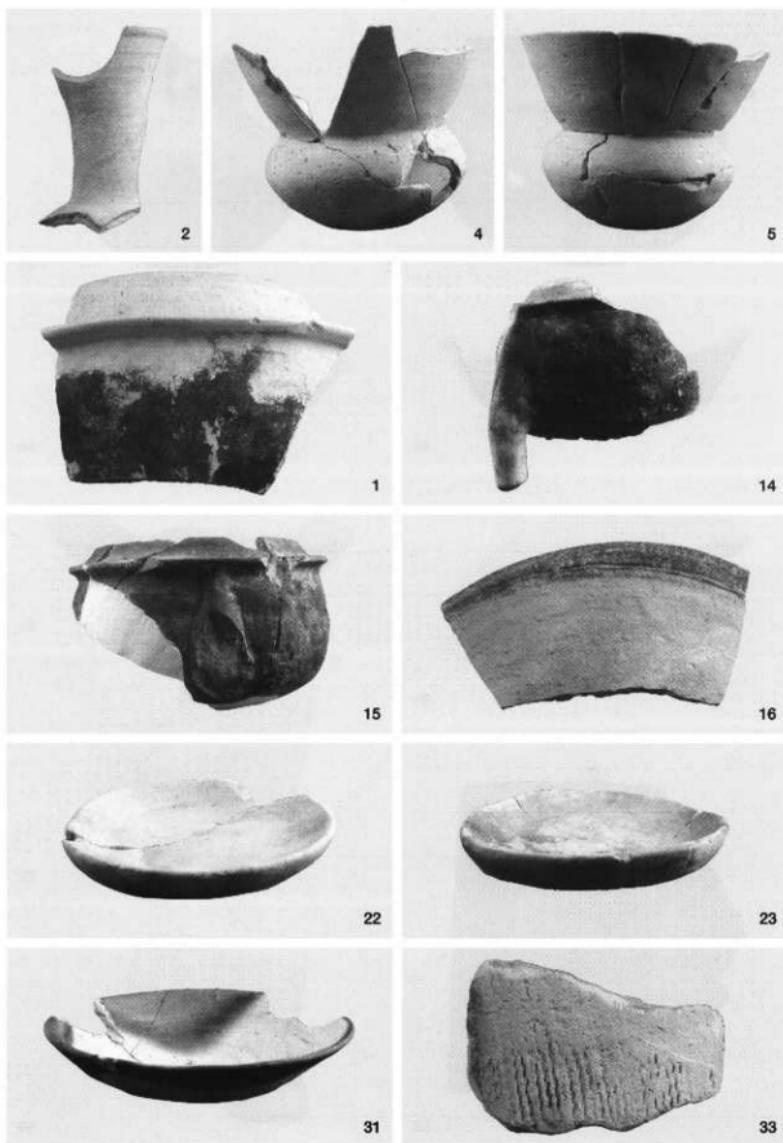
第135図 TA区第IV面・G区造構面对比図



第136図 TA区第VI面・G区遺構面對比図



第137図 TA区第Ⅷ面・G区造構面对比図



1・2・4・5：試掘，14～16：TA区第Ⅰ層，22・23：TA区第Ⅱ層，31・33：TA区SK201



43



48



46



56



61



57



68

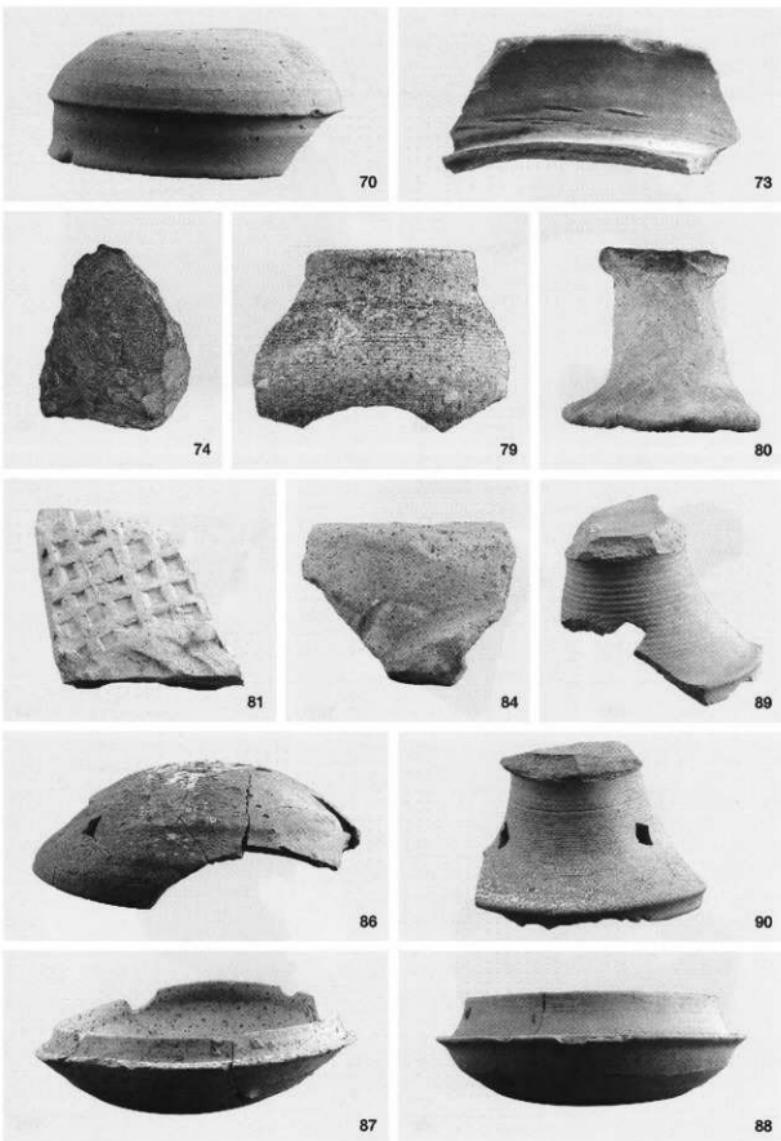


52



69

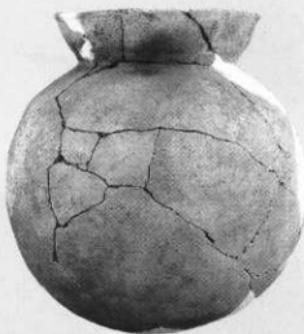
43 : TA区SE301, 46・48・52 : TA区第四層, 56・57 : TA区SD401, 61 : TA区SD402  
68 : TA区SK402, 69 : TA区SK417



70 : TA区第V層, 73・74 : TA区SD501, 79~81 : TA区第VI層, 84 : TA区落ち込み601  
86~90 : TA区第VII層



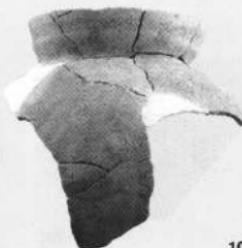
91



92



100



101



103

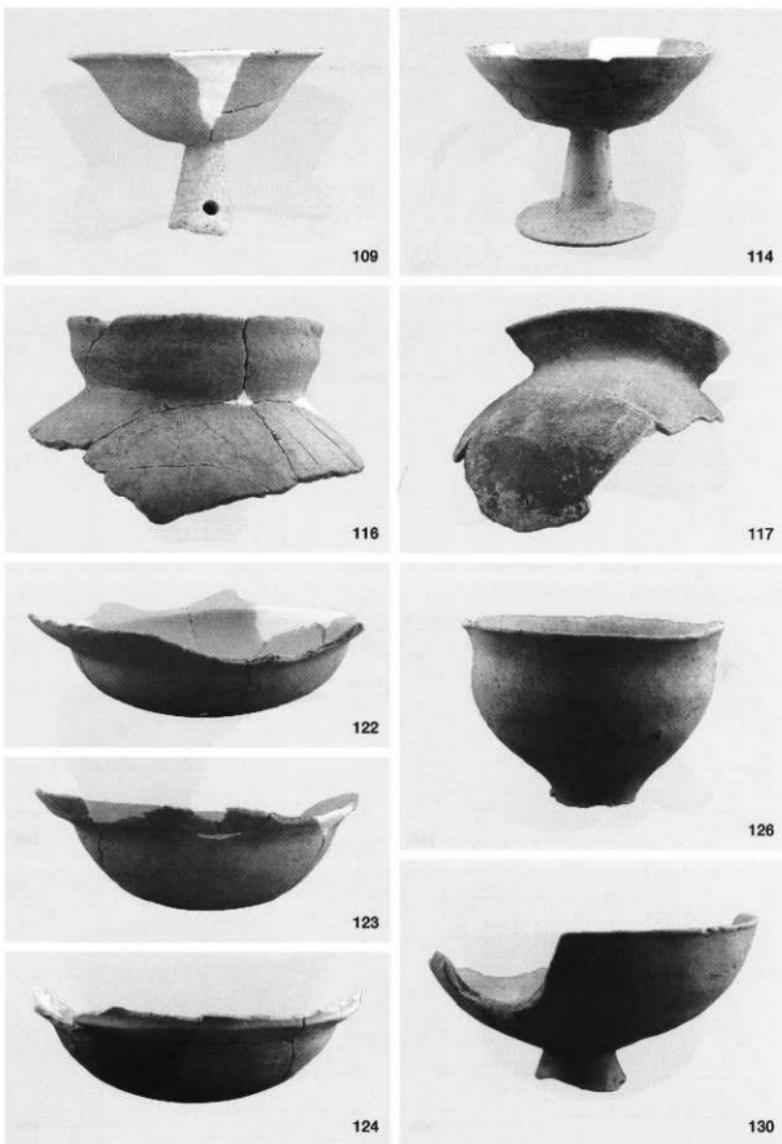


102



104

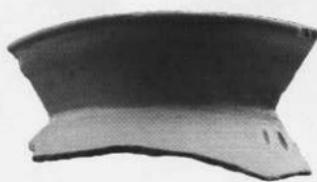
91・92・100：TA区第Ⅷ面，101～103：TA区土器群701，104：TA区土器群702



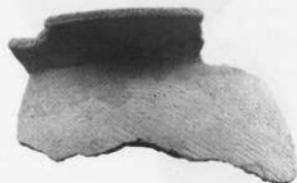
109 : TA区土器群707, 114 : TA区土器群709, 116 : TAI区SK704, 117 : TAI区SK714  
122~124・126 : TA区第VIII面, 130 : TA区SD803



132



133



134



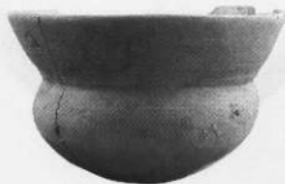
135



137



138



143



144

132～134：TA区SD803, 135：TA区P805, 137・138：TA区第Ⅴ面, 143・144：TA区SD901